

II-1. 生成過程

ディレクター 山崎 進

この章では授業番組「今日の世界文学」をどのように制作していったか、時間軸にそって記そうと思う。放送大学の授業番組の制作方法については、諸先輩によってマニュアルが作られているし、放送が始まってから既に10年以上の実績もある。「今日の世界文学」の制作方法もその実績の上になって作られたマニュアルから外れることはない。制作の目的も期間も費用も規定どおりだからマニュアル以外ではないのである。他のものとの差異をあえて探せば、「文学」講義をテレビ授業番組として制作するのは初めてのことであったから、さまざまな試行錯誤を重ねたこと、主任講師とディレクターとの打ち合せ回数がこれまでになく多かったこと、使用する資料はすべて外国のものであったからその入手が煩雑だったことなど挙げられようか。

どんな番組を作ったかはテレビ授業番組「今日の世界文学」をみてもらえば一目瞭然であるのだが、ものを創り出していく過程では、どんなことを考えどんなことをやったのか、そのプロセスが大事だとはよく言われることであり、また知りたくもなるものである。

これまでプラトニックな恋愛小説だと信じられていたのが、実は作者は金銭問題に関わる男女の葛藤を描こうとしたのだとわかったら読者はどんな感想を抱くだろうか。第10回渋沢・クロードル賞を授賞した大東文化大学助教授松沢和宏の「ギュスターブ・フローベル『感情教育』草稿の生成批評研究序説—恋愛・金銭・言葉」はフローベルの数千枚におよぶ遺稿を手がかりに『感情教育』の生成を調べた労作だが、フローベルが最初に考えていたのはプラトニックな恋愛物語などではなく、金銭の授受に絡む男女の愛憎物語だったと実証したわけだ。このほうがリアリスト、フローベルらしく思われてもくる。

フローベルをもちだすまでもなく、日本では宮沢賢治の草稿がよく知られている。ノートには空白がないほど、消線が引かれ、書き加えられた文字で埋められている。消された文字から、もう一人の宮沢賢治が顔を出す。その生成変化については入澤康夫らの仕事がある。

何故、人は生成変化などに興味を持つのであろうか。結果として出来上がった作品だけで充分ではないのか。他人の目にふれることなど考えもしないで書きなぐったメモが、ある日突然に衆目に晒されたら、それを書いた人はどう思うだろうか。美しく化粧をして自分のイメージを作り上げている女優が、予期しないときに素顔を撮られてしまいうろたえる、その時の感情に似ているのだろうか。「わたしの素顔はみなさんの前にはお見せないことにしている。わたしの“小説”のイメージが崩れてしまうから」と出演交渉する筆者に電話で告げたのは星新一だった。

しかし、人は他人について、特に興味ある対象たる人物についてはその素顔を知りたくなるものである。ジュリアン・バーンズはその著書「フローベルの鸚鵡」の中で、

「なぜ、僕らは作家をそっとしておけないのか？ どうして、書かれた小説を読むだけで足りないのか？ フローベルが望んでいたのはまさにそのことであったにもかかわらずである。書かれた文章の確たる存在とは対照的に、作家がどういう人物であるかなどというこ

とは取るに足りないことだと彼ほど信じていた作家はほとんどいない。にもかかわらず、
僕らは彼の信条に反することをあくまでつづけているのである。」(斎藤昌三 訳)

と、わかっていながらフロベールの正体を探っていく。

しかし、また、作者によっては探られることを期待するむきもある。日記と銘うちながら、
明らかに他人に読まれることを前提にして書かれているものも多く見受けるからだ。

これから書き連ねていくのは、勿論読んでもらうためのものだ。出来上がった番組を見ても
らえばそれで充分と思うのだが、研究開発番組「今日の世界文学」の制作過程を報告する義務
があるというからだ。事実経過を箇条書きふうにそのまま記してもよいのだろうが、それでは
何故そうなったかがよく分からない。ディレクターとしてその時々はどう考えていったかを中
心に記すことにした。しかし、以下に記した生成過程を読んでもらっただけでは授業番組「今
日の世界文学」がどのように考えられ、どのように作られたか、そのすべてを知ることができ
ないのは勿論である。何故なら、これはディレクターだけの報告であるからだ。テレビの表現
は、今野勉の言葉をまつまでもなく、出演者も技術スタッフも参加した〈集団論〉として考え
なければならないからだ。

1993. 10. 30 企画

第1回目の教科別教材制作部会。(放送大学東京連絡所)

出席：(主任講師) 加藤光也 (担当講師) 沼野充義、和田忠彦、柴田元幸、渡部桃子、木村榮一、福島富士男、安宇植 (放送教育開発センター) 山崎 進、栗田博行 (学園教務担当者、印刷教材担当者)

講師側と制作側との初めての顔合わせであり、講義内容の説明が行なわれる最初の間でもある。加藤主任講師から提出された講義内容(案)は次のとおりである。

放送大学「今日の世界文学」講義内容(案)

- 1 はじめに
- 2 英語文学(1)
- 3 ロシア文学
- 4 東欧文学
- 5 フランス文学
- 6 イタリア文学
- 7 アメリカ文学
- 8 シンポジウム
- 9 女性の文学(アメリカを中心に)
- 10 スペイン・メキシコ文学
- 11 南米文学
- 12 英語文学(2)
- 13 アフリカ文学
- 14 韓国文学
- 15 シンポジウム

1 (はじめに) 今日の文学は世界の変動とともに大きく変わり、従来のヨーロッパ中心の見方ではとらえきれない。「ペレストロイカ」前後のロシア・東欧の文学をはじめ、中南米スペイン語圏の文学、さらにアジア・アフリカ文学の現在の姿を、その多様性のままに紹介したい。

2 (英語文学1) イギリス文学の伝統の革新者であるD・レッシングとJ・ファウルズ、また80年代に注目を浴びるようになったA・カーター、J・バーンズ、M・エイミスの作品を紹介、あわせて、S・ヒーニの詩に代表される現代のアイルランド文学にも触れる。

3 (ロシア) 社会主義リアリズムの硬直した教義を破って新しい才能が輩出した1960年

代から、「ペレストロイカ以後」の1990年代までの流れを社会背景とともに概観し、様々な傾向の代表作品をいくつか選んで分析する。

- 4 (東欧) ミウォシュ、ヘルベルト (以上ポーランド)、クンデラ (チェコ)、パヴィッチ (セルビア)、コンラード (ハンガリー) などの作品に即して、現代東欧文学の豊かさにふれ、東欧文学の特殊性と普遍性について考察する。
- 5 (フランス) ヌヴォー・ロマンを代表する作家の一人、シモンのその後の仕事、およびクンデラに代表される移住作家の活躍を考察し、あわせてデリダなどの新しい文学理論を紹介。
- 6 (イタリア) エーコの小説「薔薇の名前」とカルヴィーノの遺稿「次の1000年のための6つのメモ」を起点に、今日のイタリア文学が直面している特徴的な問題について考えてみる。形式 (断章か長編か) と (イタリア語か異言語か) の選択の問題が中心となる。
- 7 (アメリカ1) 現代アメリカ文学が「アメリカ」という「物語」をどう読み換えているか、という点を主眼に、レイモンド・カーヴァー、ポール・オースター、ステイーヴ・エリクソン等、80—90年代の代表的作家の作品を考える。
- 8 シンポジウム
- 9 (アメリカ2) これまでアメリカ文学は、男性詩人・作家が中心的存在であるとみなされてきたが、60年代以降は、女性詩人・作家の活躍が目立つようになり、現在では、彼女たちに言及しないではアメリカ文学を語ることができなくなってしまった。この「変革」の原因に触れながら、個々の詩人・作家を紹介してみたい。
- 10 (スペイン・メキシコ) ここではC・J・セーラ、J・マルセー、A・ムーニョス・モリーナなどの現代作家を取り上げて行きたい。メキシコ文学ではO・バス、C・フエンテスを中心に見てゆく。
- 11 (中南米) メキシコをのぞくラテンアメリカ諸国の現代作家J・L・ボルヘス、(アルゼンチン)、J・コルタサル (アルゼンチン)、G・ガルシア＝マルケス (コロンビア) などを見てゆきたい。
- 12 (英語文学2) イギリス以外の英語圏諸国出身の作家たち、ラシュディ (インド)、ウォルコット (西インド)、ゴーディマ (南ア) などの作品を通じて、新しい英語文学の広がりについて考えてみたい。

13 (アフリカ) アフリカ文学の作家たちは、植民地支配、独立、その後の新植民地主義というアフリカのおかれた状況の下で、旺盛な活動を行ってきた。今回は、アチェベ、ショインカ (ともにナイジェリア)、ビテック (ウガンダ)、ホーヴェ (ジンバブエ) の小説・劇作・詩を紹介する。

14 (韓国文学) 植民地時代からの開放とそれにとまなう南北の分断、朝鮮戦争、その後の四・一九学生革命、さらに高度成長時代から民主化宣言以後までの韓国文学の展開を、金東里、尹興吉、金芝河などの具体的な作品に即してたどる。

15 シンポジウム

加藤主任講師によれば、今日の世界文学はその志向するところも様式も多様である。それならその多様性のまま紹介していこうというのが全体のねらいとなる。第1回で講座の目的を紹介し、まとめの意味で第8回と第15回にシンポジウムをおこないたい。シンポジウムのテーマは「『中心』と『周縁』をめぐる」「第三世界とマイノリティの文学」といったところを考えているが、ふさわしいテーマがあればもちろん変更になるとのことであった。

その後、担当講師がそれぞれの回の主旨を説明。

・今日の世界文学を語るとき、従来のヨーロッパ中心の文学論では語りきれなくなった。これまで「周縁」にあった地域の文学にも積極的に注目してみよう、というのが加藤主任講師の構想のようだ。J・L・ボルヘスやG・ガルシア＝マルケスらに代表されるラテンアメリカ文学のブームを考えれば合点がいくが、それにしても多くの地域の文学と作家が紹介されることになる。モダニズムの概念が多様性を内包しているようにポスト・モダンたる今日の文学も、多様性ということについては、そのまま継承していることになる。つらなる論理、つらぬく論理といったのは確か梅棹忠夫だが、「今日の世界文学」において15回をつらぬく論理は何だろうか。「多様性のまま紹介」し、それを統一する概念を探らせることが加藤主任ら講師陣の本当のねらいなのかも知れない。

・それにしても、「今日の世界文学」に限らず授業番組は、いつもディレクターにとって不意に現れる。授業番組は何時、何処で、誰によって企画され、議論され、決定したのかまるでわからぬまま、夏のある日ディレクターの前に示される。ディレクターは担当を希望する番組に対して挙手するだけだ。

企画の重要さについては今更言うまでもない。テレビ、映画、出版、新聞など情報に関係するところはもちろん、どんな企業も企画開発というようなセクションをもっている。企画が会社の将来を左右する。テレビや出版などでは企画立案は日常的に行なわれている。ディレクターは発案し、調べ、提案して、そして制作にはいる。取材は制作段階に至るはるか以前からお

こなわれているし、実際の撮影に入ったときには番組の六割方出来上がっていることはよくいわれることである。ものを創る場合担当者自身による積み上げが大切なのはいうまでもなからう。授業番組の制作には前半の作業が切り捨てられている。授業番組の制作は創作活動ではない、教育活動の一環としてだからこんなものだというなら議論はこれまでだが…。

だが一方、企画からディレクターがやるとしたらどういうことになるだろうか。一人のディレクターが所有する専門知識は限られるだろうし、制作時間等々からみても現制作体制では不可能であることはいうまでもない。

・とは言っても、さて授業番組「今日の世界文学」をどんな番組にしていくかだ。講義のねらいとするところ、全体の組立ての概要はわかったにしても、それをどのように表現していったらよいのか。大学における文学講義は大体においてテキストと板書と講師の話でおこなわれているのではなからうか。しかしこれはテレビというメディアを使っただけの講義である。テレビの特性を生かした講義を志向していくべきだろう。それにはどんな方法が可能だろうか。例えば、受講生は作家の顔を見ればより親密度が増すだろうし、作品を紹介するにしても、書かれた文章を講師が読み上げるよりももっと豊かに表現する方法もあるのではないか。また映画やビデオを利用しての講義も考えられるだろう。よりテレビ的な文学講義といった方法論を探ってみたいので考えて欲しい、というようなことを筆者から講師の方々に申し上げた。

1994. 1. 21 基本構想・外国著作物 (1)

番組の基本構想について加藤主任講師と打ち合わせ。

教科別教材制作部会でよりテレビ的な授業番組を考えたいといったものの、具体的にどうするかを未だ決めていなかったもので、ここで整理をしておこうということになった。これまで話し合ってきたことを整理すると次のとおり。

- (1) とりあげる作家のほとんどが現在も活躍中であるが、インタビューすることなど、海外取材は考えていない。
- (2) 映画、ビデオ、写真などの資料で日本国内で入手できるものはできるだけ手に入れたい。
- (3) 作品の一部紹介も考えたい。その場合どのように表現するか。例えば講師が読み上げるのか、アナウンサーや声優に頼むのか。またその時の映像はどうするのか。その時々作品に合った表現方法を考えていく。
- (4) 作品の紹介は原則として、小説など散文の場合は日本語の翻訳で、詩の場合は原語で朗読して日本語訳を字幕スーパーで紹介する。翻訳は原則として担当講師の訳を使う。
- (5) 取り上げる地域が広く、講師も9人にのぼる。ばらばらの印象をできるだけ避けるため、主任講師が番組の冒頭と最後に出演し、リードとまとめ的な対談をする。

以上がこれまで話し合ってきたことである。

紹介する作品は勿論、使用する映画、ビデオ、写真などすべてが誰かが創り出したものであり、著作権が生じている。存在がわかり、入手できたとしても著作権がクリアできなければ

使用することは不可能である。今回の場合、著作権はすべて外国にあるとおもわれる。使用の交渉には時間がかかるだろう。使用する予定があれば早い時期に出して欲しいむね申し上げる。

しかし、と講師陣から疑問も出されていた。これまで文学論等の論述や紹介記事を書いてきた。その場合は引用させてもらい、特に著作権交渉はしていない、これは慣例となっているはず、と。

確かに、著作権法では自分の論を展開する上での必要な引用は許されているはずである。でなければ自由に論文も書けなくなることになる。この問題をどう考えていったらよいのだろうか。

2.12 外国著作物 (2)

加藤主任講師、放送教育開発センターを下見。その後放送大学の松田著作権担当と打ち合わせ。

加藤主任講師はテレビ出演は初めての経験であり、制作のシステムを知りたいという。テレビは大勢のスタッフで創るものであり、スタッフ全員があらかじめ講義の内容を知っておく必要があること、番組に使うVTRや資料はテレビ用にリライトし、収録の当日以前に準備しておかなければならないこと、そのためには講義の概要が早い時期に必要なこと、などなどを説明する。一般視聴者にスタジオを案内しながら手順を説明することはよくあるが、番組が出来上がるまでにいかに時間と経費がかかるかを知ってみなさん驚かれる。

その後、松田著作権担当にきてもらい、これまで外国の著作物をどのように処理してきたかを説明してもらう。

「今日の世界文学」で扱うのは文学であり、いわゆる「著作物」で著作権が発生する。しかし著作権法では、論述の中で自論を補強するために他人の著作物を取り入れることは「引用」として無断使用も許されている。「今日の世界文学」は大学の講義であり、講師は文学論を論述するわけだから、これまでの慣例からすれば「引用」が許されるとも考えられる。勿論、出所明示などの義務はある。松田著作権担当の説明では、写真、ビデオ、映画などは著作権者の許諾を得ているが、しかし外国の場合は著作権に対する考え方に違いもあるし、今回考えているような番組では使用する著作物の数も種類も多くなり、たいへん難しい作業になるだろう、とのことであった。

しかし、「今日の世界文学」では外国の著作物を使わなかったら、講師のストレートトークだけになってしまう。あまりテレビ的な講義とはいえなくなる。とにかく、許諾が得られるかどうか、金額面で折り合いがつくかどうかかわからないが、交渉をしてみようということになった。

2.25 外国著作物リスト

NHKビデオライブラリーで作家の映像資料をリストアップ。またNEDの松下ディレクター、加藤主任講師と各講師から挙げられた使用希望の著作物について打ち合わせ。

・海外の作家の映像資料がNHKに残されていないか、加藤主任講師とともに探る。外国の作

家も講演やシンポジウム等で日本を訪れているが、その時の対談やインタビューが残っていないか。使えるものがあるかも知れないからだ。しかし、テレビ制作者は文学に関心がないためか、文学は活字の世界のもので映像的でないためか、残されている記録は少ない。今回とりあげたいとする作家のなかでは僅か、オクタビオ・パス、ガルシア＝マルケス、パブロ・ネルーダらの名前がみいだせるだけだ。

・海外の著作物の使用交渉には時間がかかる。そのため、使用する予定があるなら早く知らせたいと各講師にお願いしておいたが、これまでに挙げられてきたものは次のとおり。

(加藤光也)

James Joyce : A Portrait of the Artist as a Young Man

Ulysses

The World of James Joyce

Gertrude Stein : Three Lives

Tender Buttons

Gertrude Stein on Picasso (Edward Burns(ed))

John Fowles : French Lieutenant's Woman

Doris Lessing : Golden Notebook

Angela Carter : The Bloody Chamber

Nights at the Circus

The Sadeian Woman

Movie : Neil Jordan (directed by), The Company of Wolves ('84)

Video :

Julian Barnes : Flaubert's Parrot

Staring at the Sun

Video : Southbank Show (London Evening TV ? '91夏)

Martin Amis : Einstein's Monster

London Fields

Video : Martin Amis (The Institute of Contemporary Arts, London)

Seamus Heaney : New Selected Poem 1966-1987

The Government of the Tongue

Video : 関東学院大学 関東ボエトリ・センターでの講演

(ロシア、東欧文学＝沼野充義)

ロシア

ソルジェニーツイン : 「イワン・デニーソヴィチの一日」

アクショーフ : 「星の切符」

アンドレイ・シニャフスキー : 「ペンツ」

ヨシフ・プロツキー：「ノーベル賞受賞講演」

Video：A Maddening Space (The Newyork Center for Visual History)

ブラート・オクジャワ：「来日コンサート」(VTR)

東欧

ミラン・クンデラ：「存在の耐えられない軽さ」

チェスワフ・ミウォシュ：詩

スビグニェフ・ヘルベルト：詩

スタニスワフ・バランチャク：評論

映画：アンジェイ・ワイダ「灰とダイヤモンド」

(イタリア文学=和田忠彦)

ウンベルト・エーコ：TF (フランス国営テレビ) '92年春放映のエーコ特集

'92年10月 EC 統合記念連続講義におけるエーコの講義

RAI (イタリア放送協会) '90年放映のエーコのインタビュー

映画：「薔薇の名前」(ジャン・ジャック・アノー監督)

Italo KALVINO：Lezioni americane-Sei proposte per il prossimo millennio, Garzanti 1988

Antonio TABUCCHI：

映画：「インド夜想曲」(アラン・コルノー監督)

(アメリカ文学 (1)=柴田元幸)

Raymondo Carver：Will You Please Be Quiet, Please ?

What We Talk About When We Talk About Love.

Cathedral.

Fires.

Paul Auster：The Invention of Solitude.

The New York Trilogy.

Ground Work.

Movie：The Music of Chance.(based on the novel by P. Auster)

Steve Erickson：Rubicon Beach.

Tours of the Black Clock.

Leap Year.

(アメリカ文学 (2)=渡部桃子)

Adrienne Rich：A Change of World

An Atlas of the Difficult World：Poems 1899-1991

Your Nativ Land, Your Life：Poems

The Will to Change : Poems 1968-1970

Adrienne Rich's Poetry (Gelp, Barbara Charlesworth, and Albert
gelpi, ed)

音声テープ : Rich, Adrienne (American Poetry Archives)

Toni Morrison : The Bluest Eye

Beloved

Jazz

Video : The Writer in America : Toni Morrison (Dir. Richard Moore)

音声テープ : JAZZ, read by Toni Morrison

Margaret Atwood : Double Persephone

The Handmaid's Tale

Wilderness Tips

Dictionary of Literary Biography, Volum 53 : Canadian Writers
since 1900の中の Handmaid's Tale の手書き原稿

音声テープ : Atwood, Margaret (American Poetry Archives)

Louise Erdrich : Jacklight : Poems

Love Medicine

The Beet Queen

Tracks

Amy Tan : The Joy Luck Club

The Kitchen God's Wife

(スペイン、中南米の文学=木村榮一)

Pablo Neruda : Canto general

Octavio Paz : Poemas 1935-1975

Video : México en la obra de Octavio Paz

Isabel Allenda : (Video)

Julio cortázar : (Video)

Manuel Puig : (Video)

Mario Vargas Llosa : (Video)

Slide : Klaus Müller-Bergh ; Poesia de vanguardia y contemporánea ;
Editorial La Muralla

(南アフリカ、アフリカの文学=福島富士男)

南アフリカの英語文学

Nadine Gordimer : Is There Nowhere Else Where We Can Meet?

Burger's Daughter

Video : Nadin gordimer (WRITERS TALK by the Institute of contemporary Art, London)

Nadin Gordimer (WRITERS AND PLACE, BBC VIDEO LIBRARY)

Nadin Gordimer (WRITERS ON WRITING)

Mongan Serote : City Johannesburg (in Black Poets in South Africa, Heinemann, 1974)

To Every Birth Its Blood

Video : Mongan Serote (WRITERS ON WRITING)

アフリカ文学

Leopold Sedar Segor : New York

David Diop : Afrika

Chinua Achebe : Things Fall Apart

Video : Chinua Achebe (WRITERS ON WRITING)

Wole Soyinka : The Lion and the Jewel

Ake, the Years of Childhood

Video : The Lion and the Jewel, video-recording of an except from the play Whole Soyinka (WRITERS TALK by Institute of contemporary Arts)

Okot p'Bitek : Song of Lawino

Ngugi wa Thing'o : Weep not, Child

Chejerai Hove : Bones

Sembene Ousmane : (Video) Emitai

その他使用したい映像：ガーナとケニアの独立闘争の映像

南アフリカのアパルトヘイトに関する映像

ジョハネスバーグの風景

シャープビルの虐殺

ソウエトの蜂起

・以上が講師から使用希望として挙げられたものである。文学作品以外に、映画、ビデオ、音声テープ、スライドが挙げられている。外国 — といってもイギリス、アメリカだが — では作家の講演やインタビュー、自作の朗読などのテープが発売されている。日本ではあまりみかけないが、アメリカでは作家の朗読会がよく開かれるということだし、ロシアでは詩人の社会的地位が日本では想像出来ないほど高いという。作家のインタビューや朗読テープの発売をみると、国によって文学に対する受け入れ方の違いがみてとれるようで面白い。発売されている現代文学に関する主なシリーズに

- 「世界の現代作家インタビュー集 (WRITERS TALK by the Institute of contemporary Art, (London))」

現在活躍しているイギリス、アメリカを中心とした英語圏の作家たち100人のインタビューが収められている。ききても作家や有名な評論家による。

○「WRITERS ON WRITING」

6人の作家が自らの作品の解説や創作の仕方について語っているもの。

○「LANNAN LITERARY SERIES」

○「POETRY CENTER READING SERIES」

○「NATIONAL EDUCATIONAL TELEVISION (NET) OUTTAKES」

上記の3シリーズはいずれも AMERICAN POETRY, SAN FRANCISCO STATE UNIVERSITY。video-tape または audio-tape。作家や詩人が自作朗読しているもの。

・各講師から出されたものはざっと挙げてもらったので、これらをすべて使うということではなかろう。それにしても膨大な数にのぼる。これで著作権交渉に入れるかというところはいかない。挙ってきたのは、取り上げたい作家とその作品、関連した映像資料であるが、まだ大ざっぱすぎるのである。交渉には、必ず使うという前提でなければならず、また使う箇所も明確にしておかなければならない。現在の段階では各講師とも講義の概略は描いているだろうが、具体的な内容はまだ出来ていないかもしれない。しかし、外国の著作物の入手や著作権交渉には時間がかかるのである。講師の方々に必ず使用するということ、使う箇所を指定するようお願いすることにした。

それにしても、日本国内ならいざ知らず、外国との交渉である。それも放送大学としては前例がないほど多岐にわたる。多くの困難が予想される。

3.19 基本方針

第2回の科目別教材制作部会（放送大学 東京連絡所）

出席：加藤光也、西永良成、和田忠彦、柴田元幸、福島富士男、安宇植、山崎 進、松下式彦

第1回の教材部会では講義内容として全体の枠組みについて話し合われたが、今回は「今日の世界文学」の目的について加藤主任講師から説明された。

放送大学「今日の世界文学」

1. 基本方針

受講対象者が多様な年齢層にわたるので、具体的な作家、作品を中心に、啓蒙的な紹介を基本にしたい。作家、作品の選択は各講師の判断に従い、各地域・言語の文学を多様なまま紹介する。

「今日の」範囲について

放送大学では、英、(独)、仏、露の各国文学史が設けられており、おそらく第二次大戦後まで触れると思われるので、原則として、なるべく新しい時代、70年、80年代の文学の紹

介を中心にした。ただし、英、仏、露（米を含む）以外の、受講者になじみの薄い地域の文学については、20世紀全体の概観も必要と思われる。放送大学の講義は、印刷教材と放送授業で構成されているので、次のようにしたらどうか。

印刷教材 — 20世紀全体の概観のようなものはなるべく印刷教材に盛り込む。（例えば、第二次大戦以前5枚＋それ以後10枚）

放送授業 — 新しい時代の作家を4、5人に絞って紹介。

2. 全体のまとめ方、シンポジウムについて

今日の文学を、多くの地域にわたり、多様なまま紹介する方針なので、全体をまとめる統一的な視点はない。

ごく大ざっぱな言い方をするなら、今日の文学は、19世紀までの伝統的リアリズムが破産したあとに生まれた文学といえるかもしれない。つまり、20世紀にかけての、統一的な「自我」観の崩壊にともない、「自我の成長の物語」や「ロマンティックな恋愛の物語」が崩壊し、第2次大戦後にはそれがさらに加速されて、全く新しい型の文学が生まれるようになったというわけである。

けれども、このような図式は西洋・アメリカにはよく当てはまるようでも、二度の大戦をはさんで独立した旧植民地や女性の視点から見直せば、また違って見えてくるだろう。伝統の意味合いにしても、地域ごとの状況によって異なり、忘れられた歴史や民衆文化の伝統が再確認される場合もある。

さらに、作家自身、多言語的・多国籍的作家がふえてきて、文学の生まれる場そのものが変わりつつあるし、一方では読者の文学の受とり方も変わりつつあるように思われる。

多様な姿のままに紹介する今日の文学をどうとらえたらいいのか、受講生にも一緒に考えてもらう意味で、前半と後半の終わりに、次のテーマでシンポジウムを行う。

1. [前半] 文学における中心と周縁をめぐって

「中心」と「周縁」は、文学生産の大国と周辺諸国、伝統と前衛、祖国在住の作家と移住（亡命）作家というふうに変々に変奏できそうに思われる。

2. [後半] 第三世界とマイノリティの文学

「第三世界」には、おもにかつて植民地時代を経験した地域が含まれるし、「マイノリティの文学」には先住民の文学や移民の文学、同性愛者や女性の作家の文学が含まれる。

第1回目の教科別教材制作部会では大枠が示され、今回はその意図するところが提示された。これで「今日の世界文学」のねらいがより明確になったといえるだろう。最初の講義内容案〈今日の文学は世界の変動とともに大きく変わり、従来のヨーロッパ中心の見方ではとらえきれないその多様性のままに紹介したい〉との方針がそのままつらぬかれ、何故多様性のままに紹介するのか、その理由が明確にされたのである。それはモダンとかポスト・モダンとかいわれる

今日の文学のとらえ方はヨーロッパ、アメリカ文学にあてはめられた図式であって、その他の地域あるいは別の視点から見直せば、違って見えてくるからというものである。言い方を変えれば、従来のヨーロッパ、アメリカ中心の文学理論では今日の多様な世界の文学はとらえきれないということだろうか。

確かに世界の各地域の文学はさまざまであろうし、世界をみるまでもなく一つの地域を取り出してみてもさまざまな文学がある。例えば日本文学をみても、大江健三郎、中上健次、安部公房、司馬遼太郎、吉本ばなな…それぞれ独自の文学世界を持っている。これをどう切りとって紹介するかは担当講師の視点によることになる。

しかし、このままでは世界の各地域の文学の羅列になってしまいそうである。講座「今日の世界文学」全体をとおしてのテーマが見えてこないことになる。それを救う仕掛けが二つある。一つは各回の冒頭と最後に登場する加藤主任講師である。冒頭ではその回の文学を何故取り上げるかが話されるだろうし、終わりちかくの担当講師との対談は講義全体のテーマをベースにした加藤主任講師の視点で議論が交わされることになるだろう。もう一つは、第8回と第15回に予定されているシンポジウムである。予定されているタイトルは「文学における〈中心〉と〈周縁〉をめぐる」そして「第3世界とマイノリティの文学」。このタイトルが出されたことによって加藤主任講師が考える講座全体のテーマが見えてくる。そのベースになっているのは加藤主任講師の専門領域であるイギリス文学、近代ヨーロッパ文学であることはいまでもない。「今日の文学を多様なままに紹介する」というのは「受講生にも一緒に考えてもらう」ための一つの方策なのかも知れない。

・これで講義番組全体の枠組みと方向性がかなり明確になってきた。しかし各回がどのようなテーマでどう語られるのか、語るためにどのような素材が必要になるのか。それは各担当講師の講義計画を待たなければならない。

・制作ディレクター側からは、これは第1回目の制作教材部会でも提案しておいたことだが、文学を論ずるにしてもテレビを使つての講義であるから、文学講座のテレビ的表現の可能性を探ってみたい旨を申し上げる。そのためにはどんな方法があるか、これは1月21日に加藤主任講師と打ち合わせしたことではあるが、作家や作品の紹介には写真やビデオなどの映像資料を集める方法、作品の紹介にはアナウンサーや声優による朗読なども考えられること、どんな表現方法を採用するかは講義内容が決まらなければならないことなどを説明。また、これまでにあげてもらった作品や資料のリストは、このままでは著作権交渉にはならない。何故なら、交渉には作品の何処からどこまで使うのかを具体的に指定しなければならないからだ。映画やビデオの使用にしても同じことである。海外の著作物を使用する場合、その入手と交渉に2ヵ月は必要だという。だから遅くとも収録の2ヵ月前までに使用箇所の指定をして、挙げていただきたい、ということは2ヵ月前には講義内容が出来あがっているということになる。以上のようなことを講師の方々に申し上げた。

・「テレビ的」に文学講義をやるにしても使用する資料（文学作品、写真、ビデオ etc）には著

著作権が生ずる。その場合どのように考えて処理していくのか。NHKエデュケーショナルの松下さんはNHKの関係部所や著作権法の専門家から話をきいてきたところ説明してくれた。

- ① 写真やビデオなど映像資料を使用する場合、著作権処理をしている。
- ② 作品を講義に取り入れる場合。— 講師の方々の講義や雑誌、論文などでは、一部であるなら引用させてもらっているのが慣例のようである。

引用の概念は著作権法で規定されている。

その規定は、引用しなければならない必然性がみとめられること、主従の関係がはっきりしていること、出所をはっきりさせること、が必要である、というものである。

今回、どのように考えて処理をするか検討していきたい。

・今回は、前に挙げてもらった海外著作物のリストを見てもわかるように、その量は膨大であり種類も多岐にわたっている。入手も難航しそうだが、たとえ入手しても著作権はすべて海外にあり、著作権の所在や意志の疎通にもかなりの時間がかかりそうだ。海外著作物の利用には大変困難な作業が待ちかまえている。

3.22 資料収集（スペイン、中南米文学）

スペイン、中南米文学担当の木村榮一講師来京。NHKライブラリーに利用できる映像資料があるか、加藤主任講師とともに試写。

・木村講師は4月から交換教授としてスペインへ行き、秋まで不在になるという。この日は利用できる映像資料があるかどうかを前もって確かめるために来京されたもの。NHKでは外国から著明な作家が来日したときにはインタビューや座談会などの番組を組むことがあるし、また特集などで海外の作家を取り上げることがある。そうした番組がNHKライブラリーに保存されているが、講義にうまく取り入れることができるかどうかである。スペイン、中南米の作家ではOctavio Paz, Pablo Neruda, Garcia Marquezなどの映像資料が保管されていた。また、木村講師はビデオ「ESPEJO DE ESCRITORES Jorge Luis Borges」を持参された。それらを試写。

・スペイン、中南米の文学は2回に分けて講義することになっているが、それにしても取り上げる国と作家の数が多くなるという。1970代にはラテン・アメリカブームといわれたほどよく読まれたし、またノーベル賞作家も多く輩出した。また当然のことながらそれぞれの作家が独自の世界を作り上げているし、2、3人の作家だけを取り上げて中南米文学を語ることはできないという。木村講師は、あまり映像資料を使う時間もないだろうから講師のトークでいきたいという。これは勿論歓迎すべきことである。そもそも放送大学の講座番組は講師のトークを中心にして作られてきたし、そのようなものであろう。名講義といわれる講義や講演を何回か聞いたことがあるが、それは、内容は勿論であるが、講師の話の組立と話術に依るところが大きいように思われる。木村講師の話は普段の会話でもたいへん面白い。面白い講義が聞けるのではないかと期待。

・映像資料はほとんど使わないという木村講師が、可能ならばぜひ使いたいというビデオが、持参された「ESPEJO DE ESCRITORES」である。しかし使用許可を取るのはいへん難しいだろうという。これまでの、翻訳出版などの経験から、中南米は許可を取るのに時間もかかるし、また著作権の所在がはっきりしない場合も多いという。どうなるかわからないが、テープケースのラベルに書かれてあるプロダクションか販売会社かの連絡先を頼りに交渉してみることになった。

4.2 外国著作物 (3)

NEDの松下ディレクターと“WRITERS TALK (Writers in Conversation)”と“WRITERS ON WRITING”シリーズについて打ち合わせ。

海外著作物リストにも掲げておいたが“WRITERS TALK”“WRITERS ON WRITING”の二つのシリーズについて、何人かの講師から使いたいとの連絡があり、松下ディレクターが使用の可否について調べていたものだ。

この二つのシリーズは、日本国内向けに丸善から発売されていた。問い合わせしてみると販売契約期間はもう切れているし、たとえ期間内であっても放送利用の契約は結んでいないという。国内にも海外の映画やビデオの販売代理店はたくさんあるが、ほとんどは映画の上映やビデオの販売契約のみで放送への利用までその契約条件に入っているのはほとんどないという。また例えば放送契約が結ばれていてもそれは作品をまるごと全部放送するという意味でのもので、放送大学の授業番組のように作品のごく一部しか使わないという契約は皆無にちかいという。

それに放送大学の講座に利用するには、別の条件も加わる。普通の放送番組なら1、2回の放送で終わりだが、放送大学の場合は4年間にわたり繰り返し使うし、学習センターで利用するためビデオ化もされる。このビデオ化するという項目があるために交渉が難航することがある。多量にビデオ化して販売するのではないかとの疑念が起きるためだ。

映画、テレビは権利の保持者が多岐にわたる。制作会社、監督、出演者、音楽、カメラ…。数多くの関係者によって作られるからだ。これらを利用するには、著作権が一つにまとめられていることが必要だ。著作権がばらばらのものの使用は不可能にちかい。映画、ビデオは例えば入手できても使用できない場合がたくさんでてくるだろう。

“WRITER TALK”“WRITERS ON WRITING”についてはイギリスにあるプロダクションと直接交渉してみることにした。

6.1 著作権 (1)

松田著作権担当とNEDの松下ディレクターとともに黒川徳太郎氏に会い、著作権の話を聞く。

黒川氏は元NHK著作権部長(現NHKサービスセンター著作権業務室長)。文化庁著作権審議会専門委員もつとめられている。

今度の番組では数多くの著作物を使うし、文学の講義であるから作品の紹介や文学論を論述するためにその一部を引用させてもらうというようなことも出てくるだろう。引用の概念をどのように考えたらよいのか。これはしばしば問題となるところであり、新聞や週刊誌等で取り上げられたりする。黒川氏からいろいろ事例を引いて説明してもらった。

その後、NHK著作権部に行き、ベルヌ条約、万国著作権条約の加盟状況、戦時加算などについて話を聞く。

6.2 ビデオ資料

外国の教育教材ビデオのなかから現代文学関係の資料を検索。

外国の教育教材ビデオを日本国内向けに販売している代理店がある。そのリストの中から現代文学関係のものをひろいだしてみた。制作とタイトルは次のとおり。

BBC Video Library

WRITERS' HOUSES

WRITERS AND PLACES

POEMS IN THEIR PLACES

WRITERS AND WORKS

などのシリーズがある。近・現代のイギリスの作家・詩人を描いている。

Open University

Literature in The Modern World

1920-1980年に書かれた小説、詩、戯曲から主な作品を取り上げ、英文学が「英語による文学」に変わっていった、文学的・文化的変化を検討するシリーズ。

19th/20th Century Literature

19～20世紀初頭の英文学の作家論・作品論を扱った文学講座。

London Weekend Television

The Modern World

19世紀から20世紀への転換期に不滅の作品を生みだした10人の作家を取り上げ、ゆかりの地に取材、ドラマ、ドキュメンタリー、批評分析を織りまぜて構成している。

James Joyce, Joseph Conrad, Virginia Woolf, T.S. Eliot, Fyodor Dostoevsky

Henrik Ibsen, Marcel Proust, Thomas Mann, Luigi Pirandello, Franz Kafka

Thames Television

The Poets International

世界的に知られる現代詩人を紹介。

Ted Hughes

Drum, Taik and Dub: Voices of Caribbean-British Poets

Miroslav Holub

Six Centuries of Verse

イギリスの詩の600年。コピーには“今世紀望みうる最高の朗読陣と詩作ゆかりの土地でロケーションによる壮大希有の野心作！”とある。

などが今回の「今日の世界文学」の資料として使えると思われるシリーズである。

ここに挙げたものは全部英語文学である。他の国々でもビデオ教材は作られているものと思われるが、日本ではまだ売り出されていないのか、筆者は情報を持ち合わせていない。

それにしてもイギリス、アメリカは教育教材のビデオ化がかなり進んでいるようだ。このほかに、アメリカでは作家や詩人が自作を朗読しているシリーズが売り出されている。

講義内容に合うものがあればと加藤主任講師に連絡。

6.29 著作権 (2)

弁護士の菊池武氏に著作権について話を聞く。

菊池氏はNEDの顧問弁護士。引用の考え方や教育目的などについての話を聞き、その概念を確認。

7.21 作品、ビデオの使用箇所の指定

加藤主任講師と第2回「イギリス文学」で使用する文学作品、ビデオ、写真などについて打ち合わせ。新宿。

「今日の世界文学」で最初に収録するのは第1回「今日の世界文学のために」と第2回「英語文学 (1)」である。いずれも加藤主任講師の担当である。収録日は来月、8月20日の予定である。外国の著作物を使用するための交渉には2カ月必要ということで、先月の28日に使用箇所を挙げてもらっていたが、今日はその交渉の経過を報告し具体的にどうやっていくかを打ち合わせする。

先月28日に挙げてもらっていた作品と映画、ビデオは次のとおり。

Angela Carter

Nights at the Circus (London: Pan Books, Picador Edition, 1985. P7.11 1~P.24 11 20~26)

Julian Barnes

Staring at the Sun (London: Jonathan Cape, 1986, P.184 11 4~11)

A History of the World in 10 1/2 Chapters (London: Jonathan Cape, 1989. P.242 ll 18~30)

Martin Amis

Einstein Monster (London: Penguin Books, 1988. P.3 ll 11~26)

Seamus Heaney

New Selected Poems 1966-1987 (London: Faber and Faber, 1990.) から Anahorish (p. 21) と Punishment (p.71~72)

映画: Neil Jordan 監督 “The Company of Wolves”

少女が狼に追われて森の中を走っていくところ。

ビデオ: 「Writers Talk」から。 No.2 Martin Amis、No.11 Angela Carter

Seamus Heaney の講演。(於: 関東学園大学)

以上の著作物について交渉をすすめてきた。その結果は、文学作品の使用については、Angela Carter の作品を除いては全部、許諾を得ることができた。問題は映画とビデオである。“Writers Talk” については、「このシリーズは文学の講義の時間などに利用することは喜んでお受けする」との返事をイギリスのプロダクションからもらった。

だが、映画 “The Company of Wolves” について調べてみると予想もしなかったことが起こっていたのである。監督の Neil Jordan は映画「殺人天使」「モナリザ」などで知られているが、その作風はもの狂おしい妄想と幻想性あるといわれている。原作と脚本は Angela Carter。彼女の小説もマジック・リアリズムなどと呼ばれ、きわめて幻想的なシーンをリアリスティックに描写する作家である。この二人が作った “The Company of Wolves” もまさに妄想と幻想の世界。グリム童話「赤ずきんちゃん」をベースに思春期の少女の妄想を映像化したもの。狼=男=性=恐怖=憧憬といった少女期特有の幻想が残酷かつ官能的描かれている。アポリアッツ・ファンタスティック映画祭で審査員特別賞。Neil Jordan の代表作であり、Angela Carter の作風を知り、理解するうえでも貴重な映画と思われたが、発売元に連絡をとってみると既に会社が倒産しているというのだ。さらに著作権の所在を調べ、交渉することも可能だろうが、その時間がない。ということで、今回はその使用を断念した。

次に Seamus Heaney の講演のビデオ。これは関東学院のポエトリーセンターでの講演を大学の先生がビデオで撮影したものである。自作の詩について語り、朗読もしている。Heaney の詩を理解するうえで貴重な映像だと思われる。しかしこれを使うためには許可が必要となる。撮影した関東学院の教授からはすぐに使用許可が出たが、問題は Heaney の承諾である。この講演ビデオは発売されているわけでもないから、詩人と直接交渉して許諾を得ることになる。Heaney はイギリスとアメリカを生活の場としていて、出版社も彼の所在がなかなかつかめないという。ということで、このビデオの使用を断念。詩の紹介は日本にいる外国人に朗読してもらうことにした。

紹介の方法について。

詩については、その言葉の持つ響きが大切であるから、原詩をそのまま朗読して紹介し、そのほかの小説などの作品は日本語に翻訳して紹介することにした。

7.28 文学作品と映像

加藤主任講師、NEDの松下ディレクターと第1回、第2回の講義内容について打ち合わせ。

これまでは、講義の基本方針や海外の映像資料の収集、著作物の使用許諾をめぐって議論をしながら準備をすすめてきた。ここにきては基本的な方向が定まってきたといえようか。最初の収録まであと1カ月である。今度は個々の番組の内容をかためていかなければ間に合わなくなる。具体的な資料の収集、編集、朗読者の依頼、テロップやパターンの発注など多数の作業をすすめていかなければならないからだ。

第1回「今日の世界文学のために」は近代文学の流れを決めたといわれる James Joyce と Gertrude Stein をとりあげ、モダニズムと現代文学がどのように連なっているかを探り、「今日の世界文学」の導入としたいということである。基本的には講師のトークで、資料としては二人の作家の写真と関連する写真(1910年頃のダブリンの写真、ピカソやデュシャンなど)、それにこの講義の全容を説明するための世界地図などを用意することにした。

第2回「英語文学(1)」ではイギリスの50年代からの文学を概観しながら、現在活躍中の Angela Carter, Julian Barnes, Martin Amis、それにアイルランド文学から Seamus Heaney を中心に取り上げる。そのほかに A・Brookner, D・Rodge。作品については、先にあげてもらった個所にふれながら紹介していきたいという。

さて、ディレクターに課されるのはこれをどのようにしてテレビ講座として作り上げていくかだ。

いうまでもなく、講師のストレートトークだけでも立派な授業番組として成立する。内容が充実し、講師の話術が巧みなら、あまり意味のない映像資料などを使うよりもずっと視聴者(学生)の興味をひくだろう。しかし、一般的には映像化したほうが視聴者の興味をひきつけるし、理解を深める。このことは小中高校生を対象にした各種の調査研究でも確認されているところである。おそらく成人を対象にした放送大学の学生に対してもあてはまるだろう。(多分、放送大学の学生を対象にした調査研究は行われていることだろうが、寡聞にして筆者の目にはふれていない。)

それでは具体的にテレビの授業番組としてどう作っていくか。

まず作家の紹介をどうするか — 肖像写真や作家の出ているビデオを使うことが考えられるだろう。どのくらい入手できるかわからないが、写真についてはかなり可能性が高いのではないだろうか。しかしビデオについては全作家のものを集めることは不可能に違いない。作家に対する親しみや興味ということからいえば、作家の日常や工作中的の様子あるいはゆかりの家

や土地などを実際に取材し、ドキュメントすれば、そのほうがより効果的だろうが、海外取材の予定もないし、記録したビデオも少ない。せめて写真で紹介すれば作家に対する親しみや興味が深まるのではなかろうか。

次に、作家あるいは作品の背景 — 風土とか社会的事件とかの映像はあるていど入手できるだろうし、説明として必要な使った方が視聴者（学生）の理解がより深まるだろう。問題は、紹介する作品をどのようにテレビ化するかということである。作品はもちろん文字で書かれている。文字も言葉（発声言語）も言語であるから文字を音声化すること（朗読）は可能だし、テレビのもつ機能のひとつを活用することにはなる。だが、テレビのもうひとつの機能である映像をどうするか。朗読する人の姿をそのまま映し出すことも一つの方法であるが、すべての作品をそのように紹介するのではあまり変化はでないし、視聴者の興味をひかないのではないだろうか。作品に合った背景としての映像をつけてみたらどうなのだろうか。作品に描かれたシーン、あるいは作品全体の雰囲気を実現するような映像化ができれば作品の理解にも役立つのではないだろうか。しかしその映像は、文学作品を原作として映画化するようなものではない。映画化は映画という別の作品を作ることであるが、授業番組の中での映像化は文学作品の理解を助けるものでなくてはならないだろう。といっても作品を図解することではない。ここでは音声化された文学作品を感じとれることが大切なのだ。

それでは、朗読と映像をどのように組み合わせていくのか。組み合わせにはいくつかのパターンが考えられよう。

- ① 担当講師が読み上げる。画面は講師。
- ② 同上。画面は作品に合った映像。
- ③ アナウンサーまたは声優が朗読する。画面はアナウンサーまたは声優。
- ④ 同上。画面は作品に合った映像。

担当講師が読み上げる — これは講師は文学論を講じているのだから、読み上げた作品の一部はその論を補強する意味合いが強くなる。作品の鑑賞というより引用というべきであろうか。

アナウンサーまたは声優が朗読する — アナウンサーまたは声優はいうまでもなくことば（音声言語）による表現技術を身につけている人たちであるから、作品や読み上げるシーンをよく理解した上で、より適切な情感で朗読してくれるだろう。ロシアやアメリカでは作家や詩人自身による朗読会が盛んに催されるそうだが、朗読もまた作品鑑賞の重要な方法の一つなのだ。

さて、それでは画面の方をどうするか。朗読しているアナウンサーなり声優をそのままカメラで撮り、映し出すことはもちろん可能だ。テレビの最も重要な特性の一つは同時進行性 — 現実には生起している〈場〉にカメラを持ち込み生起している事柄を同時にブラウン管に映し出すこと — にあるとはよく言われることである。その意味から考えて、放送大学の教室とも言うべき〈場〉であるスタジオで行われている講義としての朗読をそのまま映し出すことは最もテレビ的であるというべきかもしれない。しかし視聴者（学生）に受け取って欲しいのは言葉（音声言語）として語られている文学作品の内容であって、朗読しているアナウンサーや声優の姿ではない。としたなら、作品を朗読し、作品に合った映像を出すことが最も効果的なテレビ番組となるのかも知れない。しかしながら、映像をつけることによってイメージが固定さ

れてしまい、視聴者（学生）の自由なイメージの浮遊を妨げはしないだろうか。

というようなことを考えて、いろんな紹介のしかたを試み、後で視聴者（学生）の反響を聞いてみることにしたいと思う。

しかし、簡単に背景としての映像を作るといっても、そうはいかない。実際にその映像をどうやって作るかを考えると大変難しいのだ。まず、紹介する作家と作品を知らないことには映像はつくれない。ここでとりあげるのは外国の作家であり作品である。自国の作家・作品であれば描かれたイメージは理解しやすいし、そのイメージを求めて〈ゆかりの場所〉にロケをすることも可能だ。しかし外国となると、知識は乏しくなるし、背景についても理解しがたいところが多々ある。それでも調査して〈ゆかりの場所〉にでもロケをすれば、作品に描かれたイメージに近い映像を作ることができるだろう。しかしそれも出来ない。では、どんなふうに作っていったらよいのだろうか。

今回の担当である加藤主任講師から第2回「英語文学(2)」で紹介したいと出されていた個所は次のようなものだ。

Angela Carter: Nights at the Circus (「夜ごとのサーカス」より) (加藤光也 訳)

「ねえ、おにいさん！」フェヴァーズがごみ入れの蓋がなるようなガラガラ声でしゃべりはじめた。「生まれたところっていえば、そう、最初にお日様を拝んだのは、ここ、煙だらけの古い町ロンドン！ そうなのよ。宣伝のビラに『下町のヴィーナス』って出てるのだってだてじゃない、ただ、『綱わたりのヘレン』だってよかったと思うわ、あたし、普通にこの世の岸についたわけじゃないんだもの——いわゆる正常な水路をとおって波止場についたわけじゃなくて、つまり、あたし、まるでトロイのヘレンみたいに、卵からかえったのよ。(中略)

(フェヴァーズは13歳のときから、背中にむずがゆさを感じるようになる。)

「かゆみがますますひどくなってきた。はじめはちょっとしたかゆみだったのに、すぐに背中じゅう火がついたみたいになって、あたし、かゆみ止めのローションや熱さましのパウダーを塗ってもらって、寝るときには背中に氷嚢をあてて横になっていたわ。それでも、噴火しそうな皮膚の下の恐ろしい嵐は、どうしても鎮めることはできなかった。

でも、これでもまだ、翼が生えてくるときの、ほんの先触れにすぎなかったのよ。ただ、そのときのあたしには、そんなことは分からなかった。

で、まえにおっぱいがふくらんできたときみたいに、背中で、この翼になるものがふくらんできて、それで、とうとう、14のときのある日の朝のこと…… (中略)

「かわいい白いナイトガウンを脱いで、小さな化粧台で朝の洗顔をしようとしていると、スリップの後ろがびりっと裂けて、あたしから望んだわけでも、求めたわけでもないのに、思いもかけずに突然、あたしが特別にうけついだもの——この二つの翼！——が飛び出してきた。ほんと、まだ小さい、大人の翼の半分もない翼で、四月の木の枝にひらいたばかりの葉っぱのように、湿って、ねばねばしていた。でも、それでも翼にちがいがなかった。」(中略)

「少女のころの、汚れないあの大切な夜をすごしてきた屋根裏部屋の窓から飛び出ると、風が拵げた翼の下にやってきて、あたしはぐいと持ち上げられ、気がつくやうに、空に浮かんでいた。下には、庭がすてきなゲーム盤のように拵がってそのまま動かなかった。地面がせり上がってきてぶつかりはしなかったのよ。あたしは目に見えない恋人、風の腕に抱かれていて、無事だったの。

でも風は、いつまでもあたしが驚いてじっとしているままにはさせてくれなかった。びっくりして風の腕にぶら下がっていると、風はあたしが身を任せているのに腹を立てたみたいで、少しずつ、指先からあたしを離しはじめ、あたしはまた恐ろしいことに落ちこちはじめ… 危ういところで、あたしは鳥たちの教えを思い出した！そして踵を蹴った。両足の踵をぴんと伸ばして、小さなボートみたいなあたしの体の舵のかわりにすることは、小鳥たちから教わっていたの。そうすれば、このボートの錨を、しっかり雲のなかに降ろすことができるってわけ。

それで、踵を蹴って、それから泳ぐときのように、翼の先の一番長くて一番しなやかな羽を頭の上のほうにもって行って合わせた。そうして、ゆっくりと、次第に力を込めて動かしながら、翼を振り降ろしては、また頭の上で合わせた。— そう！ そんな具合にやるのよ！ そうなのよ！ 翼の先を、くり返し、くり返し、打ち合わせると、風も気に入って、またあたしを抱きしめてくれたので、風と一緒に好きなように飛んで、大氣の目に見えない流れのなかに進路を切り開いてゆけるのが分かったわ。」

Angela Carter 「夜ごとのサーカス」の冒頭の部分である。人の姿をしているが背中に赤と紫の翼が生えているサーカスのぶらんこ乗りのフェヴァーズが、訪ねてきた青年ジャーナリストに自分の生い立ちを語っているところである。卵からうまれ、殻をつけたまま売春宿の戸口に捨てられる。14歳になったときに背中に翼が生えだし、やがて宙を飛べるようになったという。まるでファンタジーの世界であるが、シーンの描写は細部にわたって極めてリアリスティックである。翼が生えてくるところの描写は、まるでさなぎから殻をぬけて羽が生え、蝶になるときをおもわせるし、最初に宙を飛ぶときの感情の揺れ動きは初めて性を意識する少女のように生き生きと描かれている。

〈イギリスの“マジック・リアリズム”〉と称される Angela Carter 世界の始まりである。実は、青年ジャーナリストのワルサーはフェヴァーズのぺてんをあばこうとやってきたのだ。しかしフェヴァーズとその側で世話をやいている中年女リジーの話は微にいり、細にいり、ワルサーのみならず読者をも煙にまいてしまい、背中に翼が生えていることも不思議ではなくなってくるのだ。やがてフェヴァーズとワルサーは恋におち、ぶらんこ乗りと道化師となって、冬のペテルブルグまで巡業してまわることになる。サーカスを舞台としてグロテスクな性的倒錯とサディスティックな暴力とピカレスクな冒険談が、繊細で優雅な文体で瑞々しく描かれている。

Angela Carter は性、サディズム、フェミニズムなどを主題として、SF、ピカレスク小説、おとぎ話などの手法を積極的にとりいれて、〈イギリスの“マジック・リアリズム”〉と呼ばれる独特の世界を創り出している作家である。

このような作家の作品の、このようなシーンにどんな映像を創ったらよいのだろうか。写真やビデオは、現実を、つまりレンズの前に在る物をそのままフィルムやテープに記録できることがその最も大きな特性とされる。もしこのフィクションを写真やビデオで映像化しようとするならばその世界をカメラの前にあるものとして現出させて（目に見えるものとして作り出して）、記録するしかない。そんなことは時間的にも経費的にも不可能だ。では、どんな方法があるのか。筆者たちはイラストによって視覚化できないかと考えた。セットを作り、翼のある衣装を俳優に着せるのではなく、イラストによってフィクションの世界を視覚化しようと考えたわけである。別に新しい手法でもなんでもないけれども、それでも見ている人がイメージをふくらませる助けになるのではないかと考えたのである。問題はどんな絵を描くかである。

抜粋したシーンの状況設定なら、ブランコ乗りの女が青年記者の訪問を受けて自分の出生を語っているところだ。語っている内容は卵の殻がわれて生まれてきたことと、14歳の少女になったときに、背中に翼が生えてきたこと、そして屋根裏部屋の窓から初めて飛んだ時のことだ。イラストでは、翼のあるブランコ乗りと一人の青年記者が話をしているシーンに吹き出しでもつけて屋根裏部屋から飛び出すところを描いたらよいのだろうか。しかしこれでは小説の絵解きになってしまう。幻想的であって、かつリアリスティックであって、かつ文章に書かれているシーンを追うのではなくもっと見ている人の想像がひろがっていくものでなくてはならない。背中に翼のあるぶらんこ乗りを中心にサーカスの世界を曼陀羅図のように描きこんでもらうようイラストレーターに頼むことにした。

次に紹介するのは Julian Barnes の小説である。

Julian Barnes: Flaubert's Parrot (「フロベールの鸚鵡」加藤光也 訳) より

まず銅像の話からはじめることにしよう。高くそびえる銅像は、いつまでも冴えない格好をさらしたまま、銅の涙を垂らし、締めりのないネクタイに野暮ったいチョッキ、だぶだぶのズボン、ぼさぼさの口髭姿で、油断なく、超然として、その人の面影を後世に伝えている。フロベールの像はこちらに視線を返してはくれない。彼はこのカルム広場から、南の大聖堂のほうをじっと見つめている。彼から軽蔑されたお返しに、おおむね彼を無視した町の、はるか向こうを見つめているのだ。頭は高いところにあって守られているから、この作家の禿げ頭をとっくり観察できるのは、鳩たちだけだ。

この像はオリジナル版ではない。最初のフロベール像は、ドイツ軍が1941年に、鉄柵やドア・ノッカーとともに徴発していった。ひょっとすると、鋳直されて帽子の徽章にでも化けたのかもしれない。十数年のあいだ、台座の上は空っぽだった。やがて、ルーアンの市長で銅像好きの人物が、オリジナルの石膏の型を見つけだした — レオポルド・ベルンシュタムというロシア人が作ったものだった。そして市議会も銅像の製作を承認した。ルーアン市は、銅93パーセント、錫7パーセントという、本物の銅像を買い入れた。鋳造業者、シャティヨン＝スウ＝バニユーのリュディエ社によれば、この割合の合金なら腐食には強いとのことである。

(中略)

銅像の話からはじめたのは、私の計画全体がこの銅像からはじまったからだ。なぜ、書かれたものと読むと、それを書いた作家の足跡を辿りたくなるのか？ なぜわれわれは、作家をそっと、ひとりにしておいてやれないのか？ なぜ書かれた本だけで充分ではないのか？ フロベールはそう望んでいたのだし、書かれたテキストこそ客観的なものであって、作家がどんな人物であるかなど取るに足りないことだと、彼ほど固く信じていた作家もいない。それにもかかわらず、われわれは彼の信条に逆らって、彼の跡を追う。面影、顔、署名。銅93パーセントの像やナダール撮影の写真。衣服の切れっぱしや髪の毛のひと房。なぜわれわれは作家の遺品に夢中になるのか？ 言葉だけでは十分に信じられないとでもいうのだろうか？ 一つの人生のあとに残されたものには、何かを補ってくれる真実が隠れていると、そんな風に思いこんでいるのだろうか？ ロバート・ルイス・スティーヴンソンが死んだとき、商魂たくましいスコットランド人の乳母というのが、40年前に作家の頭から切りとったと称する髪の毛を、こっそり売りはじめたことがある。信者や、好事家や、作家の跡を追うものたちは、ソファに詰め物にできるくらいどっさりと、髪の毛を買い込んだものだ。

(中略)

私自身、昔、本を書こうとしたことがある。アイデアもいろいろあった。ノートだって取ってみた。しかし、私は医者だったし、妻や子供たちもいた。何かをちゃんとやろうとすれば、一つのことしかできないものだ。フロベールはそのことをよく心得ていた。私にちゃんとできたのは、医者の仕事だけだった。妻は… 亡くなった。いまでは子供たちも散りじりになって、気がさしたときだけ、便りを寄こす。彼らには彼らの人生がある、当然のことだ。「人生！ 人生！ つまりは勃起すること。」このあいだも、そんな、いかにもフロベールらしい感嘆の言葉を読んだ。読んでみると、自分が、腿の上部を修繕された石像にでもなりはてたような気がした。

この小説も、いわゆる〈近代リアリズム小説の巨匠〉フロベール的小説からみれば風変わりな小説だ。冒頭はこんなふうに始まる。「北アフリカから来た男たちが六人、フロベールの銅像の足下で金属の球をころがすゲームに興じている。混雑した通りから渡ってくる車の騒音に掻き消されることもなく、球のぶつかりあう音がはっきりと浮きたって響いてくる。指先で最後に一度からかうように撫でてから、褐色の手が銀色の球を投げた…」(斎藤昌三 訳)

われわれ読者は、てっきりアフリカからきた六人を中心にしてストーリーが展開していくものと期待させられる導入である。しかし Julian Barnes の興味は北アフリカの六人ではなく、銅像であり、フロベールなのだ。つぎに続くのは銅像についての記述だ。 — 「これは銅像のオリジナル版ではない。」最初の像は1941年「ドイツ軍によって持ち去られ」ルーアンの市長がオリジナルの石膏の型を見つけ出してきて製作させたのである。 — というように、ルーアンのフロベールの銅像がどのようにして製作されたのか、まるでルーアン市の郷土史をひもとくような記述があるかと思えば、次にはなぜ作家の遺品や足跡を調べたりするのかと問うたりする。そしてさりげなく、思わず本当かなと眉に唾をしまいそうなエピソードが挿入されたりする。 — 「ロバート・ルイス・スティーヴンソンが死んだとき…乳母というのが…作

家の頭から切りとったと称する髪の毛を、こっそり売りはじめたことがある…」

斎藤昌三による翻訳がでているが、その帯に「タイムズ文芸付録」の書評からとして書かれた一文が載っている。 — 「フロベールの鸚鵡」は、面白おかしい冗談と真摯な叙述を驚くほど巧みに交錯・総合させた小説である。ここには、文学的考証があり、文学評論があり、文学的実験の展開がある…」

斎藤昌三によればフロベールの手紙や馴染みの場所 — 記念館、病院など — の叙述は確かな事実に基づいて書かれているという。

フロベールの小説や足跡についての新しい発掘、そして斬新な視点からの考証や評論。しかしこれは、こ難しい文学評論などではなく、まぎれもなく知的で楽しい小説である。レッテルはどうでもいいのだが、こうした Julian Barnes の作風を称して〈メタフィクション〉などと呼んでいる。

さて、抜粋した上記の一節にどんな映像をつけたらいいのだろうか。これは Angela Carter の小説より創りやすいように思える。というのは、「夜ごとのサーカス」はフィクションの世界であるが、「フロベールの鸚鵡」は事実に基づいて書かれている。書かれていることが事実であることを証明するような映像、あるいは補足するような映像が適しているのではないだろうか。フィクションの世界は作品の中に作者によって描かれていると同時に、それを読む読者の頭の中にも自由に描かれる。読者が描いたイメージと画面に映し出されたイメージが違っていたら、その溝を埋めるのに大きな努力を必要とするだろう。その点、事実によって書かれているものは、その事実を証明したり、補足したりするイメージがあれば、読者は満足するのではなかろうか。幸い、カメラは現存在を記録することができることをその最も大きな特性とする。事実をイメージとして定着させやすいのである。

ということで、「フロベールの鸚鵡」の一節にはルーアン市にあるフロベールの銅像、そしてフロベールの残された絵や写真、署名、日記、書簡、原稿などを記録した映像をあてたら効果的だろうと考えた。 — だが果たしてそんな映像が、ゆかりの場所にも行かないで手に入るのだろうか。

加藤主任講師の意向では、同じ Julian Barnes から次の2編も紹介したいという。

Julian Barnes: Staring at the Sun (「太陽をみつめて」加藤光也 訳) より

…ほとんどのひとは、自分たちの人生がさまざまな調べに満ちあふれているものと考えている。自分たちの生がひとつのメロディのようになりひろげられると思っているのだ。彼らは人生に、提示部や、展開部や、再現部、そして必要とあればみごとなクライマックスを求めるし — じっさいそのように展開するのだと信じている。そのような願望は、グレゴリーには素朴すぎるように思われた。彼が期待するのは曲の断片だけであり、あるフレーズがまた現れたときにも、また現れたなと思うだけで、それが自分の力によるものと考えたよりも、偶然のなせるわざと考えた。そのいっぽうで、メロディがつねに逃げ去ってゆくことも承知していた

Julian Barnes: A History of The World in 101/2 Chapters (「10½章で書かれた世界の歴史」 加藤光也 訳) より

…世界の歴史だって？ そんなものは暗闇にこだまするいくつかの声にすぎない。いくつかのイメージが、数世紀のあいだ燃えさかっては、消えてゆくだけだ。

(中略)

ぼくらはいま、現在という病院のベッドに横たわって（それにしても、近ごろのベッドのシーツときたら、なんて清潔なんだろう）、そして、泡のように浮かんでは消えてゆく日々のニュースを、腕に点滴されている。(中略)

ぼくらは、ぼくらが知らない事実や、ぼくらが認めたくない事実を蓋をするため、物語をつくる。ぼくらの不安、ぼくらの苦痛をなだめてくれるのは、心地よいつくり話だけなのだ。ぼくらはそれを称して歴史と呼ぶ。

「太陽を見つめて」 — これは平凡な「女の一生」の物語であると同時に、結婚とは、性とは、戦争とは、神とは、死とは、そして本当の人生とはと問う、問いかけの書である。

主人公ジーンはロンドンから遠くはなれた片田舎の純朴な娘。第一次大戦が始まったときは、17歳。寄宿していたパイロットの「太陽が二度昇るのを見た」という体験談に空へのあこがれをつのらせる。やがて警察官と結婚、20年にわたる平凡な生活。40歳ま近かになって妊娠、それを機に、「ほんとうの人生」を求めて離婚。「逃げる」ように転々と職を変えながら息子を育て、彼をひとりにしておいてもよくなると「世界の七不思議」を見るためにピラミッドや万里の長城やグランド・キャニオンを訪れる…

ジーンの人生のストーリーを追うなら、まさに平凡な日常しかない。しかしその生活の中でジーンは常に問いかけていく。「天国は煙突の上の方にあるのか」「ミンクはなぜ並外れて生命力が強いのか」「死は絶対か」「宗教はノンセンスか?」「自殺は容認されるか?」…上記に抜粋した箇所は、60歳に近い息子・グレゴリーが自室でジャズを聴きながら人生について考えるところである。

「10½章で書かれた世界の歴史」 — “はなれわざ、としか言いようのない小説!” これはこの小説の帯に書かれているコピーである。キクイムシがノアの箱船の状況を語ったり、司教の玉座の脚を喰い荒らしたキクイムシをめぐる宗教裁判が行われたりと、驚くべき事実と奔放な想像力を駆使して書かれた小説である。メタフィクション的仕掛けがおもしろい。表題のごとく、十章半からなっているが、ストーリーからすればそれぞれ独立している。第一章キクイムシの目からみた神話のパロディ。第二章エーゲ海を航行するカルチャー・ツアーの船客を人質に同志の解放を要求するアラブ人のテロリストたち。第三章玉座を喰い荒らして司教を不具者にしたと、キクイムシをめぐる宗教裁判（この裁判は実際に行われたというから、面白い。）…このような作品のどこが「世界の歴史」なんだろうかと、読者はふと疑問をいだく。そのときに、さりげなく挿入されているのが上記の抜粋の部分である。

さて、このような内容の2編を朗読したときにどんな画面をつくったらよいのだろうか。両方ともシーンの描写でもないし、事実の説明でもない。それは、ジャズと人生についての考察

であり歴史についての論述である。

ここで「文学」と「映像」 — ことばによる表現方法と映像＝イメージによる表現方法の違いについて考えざるをえなくなる。ことばは抽象的・概念的・総体的・主観的・過去形であるのにたいしてイメージは具象的・現実的・個別的・客観的・現在進行形であるということだ。ことばで表された「木」は木というものの一般概念である。それは桜でも梅でも杉でもない。また花が咲いていようが、葉が散っていようが、三本であろうが一本であろうが木は木なのである。しかしイメージとしての木は満開の、廃校になった小学校の、一本の桜でなくてはならないのだ。「人生とは…」「歴史とは…」。人生も歴史も視覚的存在ではない。厳密にことばによる表現とぴたり一致するイメージなどありはしないのだ。

そんなことは自明のことだ。しかし…と考えるのは、ディレクターという職業人の性癖か。「人生」を現すイメージはつくれるはずだ。人生、人生、人生…老人、笠智衆、夕暮れ、港町…なんだか演歌じみてきた。よそう、そぐわない映像をつけると逆に効果を失ってしまうものだ。ここでは原作のもっている意味を伝えることが大事なのだ。

ということで、上記の2編については朗読する声優の姿をそのままカメラで伝えることにした。 — だが、どうも違うような気もする —

次にアイルランドの文学で、詩人の Seamus Heaney を中心にしたいという。取り上げる詩は次の二編である。

Anahorish

My 'place of clear water',
the first hill in the world
where springs washed into
the shiny grass

and darkend cobbles
in the bed of the lane.
Anahorish, soft gradient
of consonant, vowel-meadow,

after-image of lamps
awung through the yards
on winter evenings.
With pails and barrows

those mound-dwellers
go waist-deep in mist
to break the light ice
at wells and dunghills.

Punishment

I can feel the tug
of the halter at the nap
of her neck, the wind
on her nacked front.

It blows her nipples
to amber beads,
it shakes the frail rigging

of her ribs.

I can see her drowned
body in the dog,
the weighing stone,
the floating rods and boughs.

Under which at first
she was a barked sapling
that is dug up
oak-bone, brain-firkin:

her shaved head
like a stubble of black corn,
her blinfold a soiled bandage,
her noose a ring

to store
the memories of love.
Little adulteress,
before they punished you
you were flaxen-haired

undernourished, and your
tar-black face was beautiful.
My poor scapegoat,

I almost love you
but would have cast, I know,
the stones of silence.
I am the artful voyeur

of your brain's exposed
and darkend combs,
your muscles' webbing
and all your numbered bones:

I who have stood dumb
when your betraying sisters,
cauled in tar,
wept by the railings,

who would connive
in civilized outrage
yet understand the exact
and tribal, intimate revenge.

Seamus Heaney は現代アイルランドを代表する詩人。北アイルランドに生まれる。アイルランドは James Joyce や Samuel B・Beckett などの偉大な作家・詩人を生んでいるが、Heaney は William B・Yeats 以後の最大の詩人、との評価を受けている。最初、アイルランドの美しい自然を詠む叙情詩人として出発したが、1968年アイルランド紛争が勃発すると、民族のアイデンティティを求めて、植民地アイルランドの歴史や情念を詠うようになる。

「Anaholish」は「澄んだ水の土地」という意味のゲール語が英語風に訛ってできた土地の名前。アナホリッシュの美しい自然とそこでの素朴な暮らしを詠っているようにみえるが、加藤主任講師の説明では、従来の類型化した自然ではなく、Anaholish という英語化した地名からその音の響きに誘発されて子供時代の田園風景を思い出し、そのことが歴史の中に埋もれていたアイルランドの伝統を発掘再創造することにもなっている、ということだ。

「Punishment」。実際に起きた事件で、NHKニュースでも放送されているが、アイルランドの娘がイギリス兵と付き合ったために頭を剃られて曝しものにされるということがあった。ちょうどそのころに、Heaney はユトランド半島の泥炭地から発掘されたミイラの記録に目をとめた。それは少女で、仰向けに横たえられて目隠しをされ、頭部の右半分は短く髪を刈られ、

左半分は剃られていた。そのすぐ下から、数本の木の枝と大きな石が発掘された。今から数千年前、姦通かなにかの罪を犯した娘が罰せられ、生きたまま、おそらく当時は沼地であったであろうこの泥炭地に投げ込まれたのだ。Heaneyには現在と古代が二重写しになって見えたのだろう。そしてこの娘たちに愛を感じそうになりながらも、こう詠う。who would connive in civilized outrage yet understand the exact and tribal, intimate revenge. アイルランド人である Heaney の苦しみと怒りが込められている。

これらの詩の背景としてどんな映像をつくるか。

「Anahorish」。小川の澄んだ水がきらきらと輝き、露草の、宝石のように葉の上のころがる水玉。そして静かな冬の夕暮れ、軒下に薪を積み上げた家と手押し車を押す村人が夕日の中でシルエットとなって浮かび上がる — そんなイメージが浮かぶ。そうしたイメージをもって撮影に出かければある程度思いどおりの映像がつかれるかもしれない。しかし詠われている場所は北アイルランドのアナホリッシュである。海外ロケが予定されているわけではないから、新しく撮影するのは不可能である。これまでに撮影されたものがあるかどうか探すしかない。アナホリッシュと特定され、描かれたイメージに合うものを探し出すことなどほとんど不可能にちがいない。では、どうするか —。

「Punishment」。この詩に詠われているのは古代の娘と現在の娘。ともに事実であり現実である。詠われている背景は重い。アイルランドの現実と、詠うきっかけとなった発掘されたミイラ — ユトランド半島から目隠しされたミイラが発掘されたということを放送大学の学生たちのどれほどが知っていようか — を知らなければ、この詩をよく理解できないのではないだろうか。そうした説明は講師の解説に依るとしても、事実として、ミイラや曝しものにされた娘の姿を映像で見せれば説得力が増すのではなからうか。曝しものの娘の映像はあまりに生々しすぎるかの知れないが、ミイラの映像記録は是非欲しいところだ。発掘されたのは1952年頃のことというからどこかに収蔵されているだろう。現地に行って撮影すれば簡単だが、これも既に撮影されているものを借りるしかない。どう探したら入手できるだろうか —。

外国のものをとりあげるとき、ことばで説明するのは簡単だが映像で説明するとなると、著作権処理もだが、思いどおりの資料や写真の入手が大変困難なものである。

さて、詩と映像について少し考える。

詩は既成のことばの配列を排除し(記号論的にいえば、コードからの逸脱)、表出されていることばが指示する対象物だけでなく異なったイメージをも作りだし、新しい意味を付加しようとする。だから、詩はその成立と同時にメタファーを内包していることになる。表出されたことばの裏にあるもの、それを映像でどう表現するか。勿論、エイゼンシュテインのモンタージュ論を持ち出すまでもなく、映像表現(映画、テレビなど)でもショットを連ねることにより表出された映像にはない新しい意味を創り出す。この機能は同じである。それなら「Anahorish」「Punishment」でメタファーとして伝えようとしているものを映像表現できるのか、と考えるのは論のはき違いというものである。何故なら、詩と映像では(言うまでもないことだが)表現

媒体が違い、同じものを表現するにしても出来上がったものはまるで違った形のものとなる。Heaney が伝えたかったものを映像表現しようとすれば、いま、この「今日の世界文学」でやろうとしているものとは違う形になるということだ。いま、やろうとしていること それは提示された作品の理解を、どう映像で深めうるかということだ。

8.4 タイトルの撮影

東京・青山でタイトル用のビデオ撮影。

青山にある円形劇場、国連大学の周辺で撮影。テレビにおいてタイトルはどんな機能をはたしているのだろうか。例えてみれば本の表紙にあたるものだろうか。書店に入ってあれこれ物色しているとき、まず目にとめるのはタイトルの文字。タイトルから自分に関心があるものかどうかを判断し、そして目次をめくる。そのとき、つまり本を手にとろうとするときに、表紙の装丁が取り上げる誘引として働くかどうかだ。同じような内容を示唆するタイトルの本が並べられているとすれば、やはりしっかりした装丁のものを取り上げるにちがいない。また装丁の面白さからページをめくってみることもある。テレビの場合はどうだろう。どの番組を見るかはあらかじめ決めてあって、タイトルバックが出てからこれを見てみようと思う人は少ないかも知れない。しかし見ようとする番組はまだ決めてなくて、あれこれチャンネルを廻して面白そうなタイトルバックがあれば、そこで止めることもあるだろう。またタイトルバックを見ながら、どんな内容になるのか心ときめかすこともあるかも知れないし、きれいな映像が快適なリズムで流れれば気持ちよく内容に入っていけるというものである。

タイトル用の映像をつくることは案外に難しい。こうでなければならないとか、これで決まりといったものが何もないからであるし、見ている人の気をひくものであったほうがいいし、15回におよぶ内容を予感させるようなものであればなお良いわけである。

今回はどんなタイトルバックにするか。

講座名は「今日の世界文学」。「今日」「世界」「文学」をイメージできるものと考えた。現代性と空間的な広がりとう文学。

まず「今日」「世界」のイメージ。

国連大学は丹下健三の設計になるもので、空中に突き出るその全体のフォルムもさることながら、壁面の上下に直線で引かれた幾何学模様が美しい、現代感覚あふれる建築である。それに、コンピューターが描き出す地球を組み合わせたらどうだろうか。筆者はかつて「ワールド・ウェザー」という特集番組を作ったことがある。世界に四つの気象衛星があがっているが、そのデーターをコンピューターで画像処理して、リアルタイムで地球上の雲を再現し、天気を知ろうとしたものだ。リアルタイムでデーターが世界中から送られてきて、三万五千九百キロの宇宙から見た地球がコンピューター画面に描き出されたときには、自分たちでつくっている番組にもかかわらず、思わず感動したものだ。同じCGでも絵として描いたものはたくさんあったが、実際に衛星からのデーターを使って描いた地球はこれが最初であった。その質感、実在感はいままでのものとはまるで違うものであった。

そして「文学」のイメージ。

ことばで表現された芸術。そこに書かれているものは宇宙の構造でもなければ、動物の世界でもない。人と人の関係、ひとの存在、哲学…。月並みだが、文学書とそこに描かれている人々のすがたの組み合わせを考える。

現代建築、地球、文学書を撮影。世界の人々の映像はNHKライブラリーから借りることにしよう。

8.5 海外の著作物の入手

NEDの松下ディレクター、三橋さんと資料の入手について打ち合わせ。

第1回「今日の世界文学のために」と第2回「伝統の革新～英語文学(1)～」(タイトルは○文学だけでなく、それぞれの内容に合ったタイトルをつけることになった。)に必要な資料についての打ち合わせ。

この日までの資料の入手の経過を次に記しておく。

- 作家の肖像写真 — とりあげる作家のほとんどの写真は入手できるのだが、Seamus Heaney のものがないという。作家の紹介は肖像写真でということにしているから、一人だけないというのでは整合性という点から問題である。収録までに間に合わなかった場合どうするかを打ち合わせておく。
- 映画・ビデオ — 担当の加藤主任講師から使用希望が出されていたが、使用許可がとれないものがあったことは前に記した。
- 文学作品 — Angela Carter の作品についてはまだ連絡がきていないという。昨年死亡したので著作権の所在がはっきりしないのかも知れない。収録日まで来なかったら、使用不可ということになる。あまり時間はないが、とにかく収録の日まで待つことにする。
Seamus Heaney の詩について問い合わせたところ、翻訳権は東京の出版社が持っているという。原文を使うことはできるが、翻訳して紹介できないことになる。実は、詩はことばのもつ響きが大切であるから、原語で朗読して翻訳文をスーパーインポーズしようと加藤主任講師と打ち合わせしてあったのだが、それが出来ないことになった。今回だけ原語を画面に出すことにした。英語の詩だから理解できるだろう。ポーランド語などだとそうはいかないが…。
- 背景イメージ — Angela Carter : 「Nights at the Circus」のイメージについてはNHKアートの上野新司さんをお願いすることにした。
Julian Barnes : 「Flaubert's Parrot」 ルーアン市とフロベールの遺品については、幸いなことに、以前に放送大学で放送した「フランスの言語・文化」で撮影したビデオが放送教育開発センターに残されていたのでそれを使うことにした。だが、肝心のフロベールの銅像がない。これがないと小説の受け取り方が違ってくるような気がする。つまりメタフィクションとしての魅力がなくなってしまうような気がするのだ。(小説は小説としてあるのだからそんなことは決してないのだが、テレビで紹介しようとするとなんかそんな感じにとらわれてしまう。) なんとかして手に入れたいと考える。

Seamus Heaney: 「Anahorish」 北アイルランド、アナホリッシュ。その小川や民家を撮った写真が、それも水のきらめきや夕暮れの写真など、東京にいながらにして手に入るとは考えられない。アイルランドの自然を撮った写真なら何枚かは入手できそうだという。「Punishment」 ユトランド半島から発掘されたミイラ。ドイツ大使館に問い合わせるとその写真はあるという。早速、借りることにした。また、NHKニュースを調べると曝しものにされたアイルランド娘の項目もあるという。ただ、ニュース映像は生々しすぎるような感じがする。とりあえず試写。

この講義で使用するのは紹介する作家の作品だけではない。写真やビデオ、作品の背景イメージとしての映像、それらを外国に問い合わせ取り寄せなければならないし、そのすべてについて著作権が発生する。一人や二人ならよいのだが15回にわたって70人から80人の作家がとりあげられることになる。大変な作業を始めてしまったものである。

8.6 シノプシス

加藤主任講師と第2回「伝統の革新～英語文学 (1)～」の内容についての打ち合わせ。

本来なら、講義の原稿かもしくはシノプシスが出来ていて、それから映像資料やらパターンやらを準備していくのだが、今回は逆になっている。外国の資料を集めるのに時間がかかるということで、資料収集の準備を先に始めたものだが、かなり無駄な作業も行ったかも知れない。示されたシノプシスは次のとおり。

〈内容〉

英語文学として、イギリスおよびアイルランドの70、80年代の小説・詩の紹介。

映 像 資 料	内 容
イギリス、アイルランドの地図	<p>地理的範囲の説明。</p> <p>(アイルランドは1949年以降「アイルランド共和国」)</p> <p>[イギリス文学]</p> <p>・戦後のイギリス文学の流れについて略述。</p> <p>50年代の「怒れる若者たち」</p> <p>60、70年代の福祉国家の文学</p> <p>80年代の小説のルネサンス</p>
写真 (カーターの肖像)	<p>アンジェラ・カーター (1940-'92)</p> <p>略歴 南ロンドン育ち</p> <p>戦時の祖母</p> <p>日本に来たこと</p>

<p>(映画「狼の血族」)</p> <p>朗読「夜ごとのサーカス」</p>	<p>おとぎ話をかきかえた「血塗られた部屋」に、エロティシズムと暴力との幻想的な融合がよく現れている。</p> <p>「ゴシック小説」の伝統</p> <p>代表作として「夜ごとのサーカス」</p> <p>女性版ピカレスク小説として、フェミニズムの立場を強く打ち出したもの。</p> <p>但し、魅力は「マジックリアリズム」の奔放な語りにある。</p> <p>作品の鑑賞</p> <p>「賢い子供たち」への言及</p>
<p>朗読「フロベールの鸚鵡」</p> <p>フロベールの肖像</p> <p>銅像</p> <p>鸚鵡のイラスト</p> <p>写真</p>	<p>ジュリアン・バーンズ (1946-)</p> <p>略歴および作家歴</p> <p>心理小説、実験小説、政治小説を書く傍ら探偵小説も書く。</p> <p>80年代の反リアリズム小説の代表としての「フロベールの鸚鵡」</p> <p>フロベールとの対話による「人生」という物語についての「メタフィクション」である。</p> <p>作品の鑑賞</p> <p>バーンズのエッセイ的小説作法と細部の魅力について。</p> <p>「太陽をみつめて」のユーモア。</p> <p>・伝統的風俗小説の変容について</p> <p>アニータ・ブルックナー (1928-)</p> <p>ディヴィッド・ロッジ (1935-)</p> <p>マーティン・エイミス (1949-)</p> <p>三人の紹介</p>
<p>地図</p> <p>略歴譜</p> <p>朗読 詩二編</p>	<p>[アイルランド文学]</p> <p>・アイルランドの地理、歴史について略述</p> <p>・戦後の代表的作家のうち詩人ヒーニーをとりあげる。</p> <p>・シェイマス・ヒーニー (1939-)</p> <p>略歴 北アイルランドの状況との結びつき</p> <p>アイルランド共和国への移住</p> <p>アメリカとの往復</p> <p>詩の鑑賞</p>

イメージ
遺体の写真
1987年関東ポエトリー・センターでのビデオ

「アナホリッシュ」
「罰」
個人的体験と社会的問題を結び付けるヒーニーの詩法について
ヒーニーのエッセイについて

これでおおよそその講義の内容がわかる。本来ならこの段階から資料の収集や撮影、パターンの製作などにとりかかるのだが、今回は資料の収集が先行した。しかし、と講師の方々はおっしゃるかも知れない。講義内容を組み立てるにしても資料の収集が先ではないか。資料を集め、それを考察しながら内容を固めていくのだからと。しかしその行為は番組制作にとりかかる前の段階での話だ。

ディレクターにとって何故講義の原稿やシノプシスが必要なのか。それは講師が何を話すのか、どんな話の組立をするのかが判らないのでは資料の準備も、撮影取材もできないのである。話の組立は撮影のしかた、編集のしかたに大きく関わってくる。放送大学ではない、一般の番組では資料を収集し、企画し、取材をして番組の制作にとりかかる。しかし放送大学では、企画の段階ではディレクターは関わっていない。関与するのは制作だけだから、その時には既に話の組立ができていないと効率が悪いことになる。

今回は加藤主任講師とディレクターとが何回も打ち合わせをして作業をすすめてきた。おおよそ講義の内容がわかっていたから資料の収集を先行してきた。それでもかなり無駄な作業もしてきている。実は、この回の講義に入れる予定で入手したり、著作権交渉をすすめてきた作品が削除されている。Julian Barnes の「太陽をみつめて」と「10½章で書かれた世界の歴史」それに Martin Amis の「アインシュタインの怪物」が除かれているのだ。これらは、講義内容はわからないけれども、講師から使用希望として出されている作品について交渉をし、著作権者の了解を得ているものだ。使わないでは相手に対して約束違反ということにもなる。これらをどうするか…。映画「狼の血族」は会社が倒産しているということなので使用不可になるだろう。Seamus Heaney の関東ポエトリーセンターでの講演ビデオは詩人本人の了解が得られれば使用できることになるが、まだ連絡がとれていない。

第一回「今日の世界文学のために」のシノプシスはまだ書けないという。収録は同日の予定なのだが……

8.19 朗読の収録

Seamus Heaney の詩二編の朗読を収録。朗読者は早稲田大学助教授で、放送大学の客員助教授でもある Graham Law さん。

Seamus Heaney は北アイルランド出身。それに「Ahahorish」は〈澄んだ水の土地〉という意味のゲール語が英語風に訛ったものというから、アイルランド語を話せる人に朗読をお願いしたいところである。そういう人を知っているということで、紹介してもらうように頼んでは

あったのだが、ちょうどこの時期は夏休み。ヨーロッパの人たちはバカンスをとるのだ。その人も日本にいないということで、Graham Law さんにぜひにとお願いしたのだ。専門はイギリス文学。もちろんきれいな英語を話される。朗読を聴いていた加藤主任講師は少し不満そうである。Heaney の意図は「Anahorish」という音の響きによって子供時代の田園風景を思い起こさせ、アイルランドの伝統を再創造することにある。だから「Anahorish」の発音はアイルランド風でなければならない。それにしては、Law さんの朗読は英語的すぎる、というのである。しかしアイルランド語の発音は出来ないというのであるから仕方がない。

この日に収録したのは「英語Ⅲ」の収録に Law さんがスタジオ入りしていたからである。

8.20 最初の収録

第二回「伝統の革新～英語文学(Ⅱ)～」の収録。担当は加藤主任講師。朗読：屋良有作、南場千絵子、Graham Law

このシリーズ最初の収録である。この日、第一回「今日の世界文学のために」も収録する予定で準備をすすめてきたのだが、第二回の1本のみの制作になった。というのは第一回は全体の導入であるから全体の講義内容を見てからでないとまとめることは出来ない、9人の講師の講義内容をまだ把握できていない、ということで収録は見送ることにしたものである。

初めての収録である。時間は2本収録の時のように、朝9時40分に作業を開始した。技打ち、カメラ割り…と進行していくのはいつものとおりである。10時30分には朗読をお願いした屋良有作さんと南場千絵子さんがスタジオ入りして、11時いよいよテストにはいる。

ここに至るまでに、四月からいろいろと準備してきたことはこれまで記してきたとおりである。入手できなかったり、使用許可がとれなかったものもある。その結果をこここでまとめておく。

作家：Angela Carter

Julian Barnes

Seamus Heaney

(A・Brookner, D・Rodge, M・Amis)

紹介する作品：A・Carter; Nights at the Circus (「夜ごとのサーカス」)

朗 読：南場千絵子

背景イメージ：イラスト (絵・上野新司)

J・Barnes; Flaubert's Parrot (「フロベールの鸚鵡」)

朗 読：屋良有作

背景イメージ：ルーアン市、フロベール記念館と遺品 (VTR)

(銅像の写真はまだ入手できず)

; Staring at the Sun (「太陽をみつめて」)

朗 読：屋良有作

背景イメージ：

; A History of The World in 10½ Chapters

(「10½章で書かれた世界の歴史」)

朗 読：屋良有作

背景イメージ：

S・Heaney; Anahorish (「アナホリッシュ」)

Punishment (「罰」)

朗 読：Graham Law

背景イメージ：アイルランドの自然 (写真)

ボッグ (沼炭地) の写真

目隠しされた少女のミイラ (写真)

その他：作家の肖像写真

地図、年譜、本など。(Heaneyの関東ポエトリーセンターでの講演は本人と連絡がとれ、了解が得られたら使用するというので編集も済んでいた。しかしこの日までに連絡がとれず、この講義の中で紹介出来ないことになった。)

11時 テスト開始。講師の話と朗読部分をわけてのブロッキングも考えられたが、朗読を始めるタイミングも知りたいので、通してテストすることにした。しかし始まってみると講師の話が長すぎたり、途中で途切れたり、なかなかうまくいかない。加藤講師はカメラの前で話すのは始めてだという。原稿を見ないで自然の語り口でいきたいというので期待していたのだが…。

自然な語り口。これはとても大切なことのように思える。同じ内容を話していても語り口が自然だと思わず聞き入ってしまうし、原稿を読んでいるなとわかると妙にそのことが気になって内容が頭に残らなくなる。理解しにくい内容を表情もなく話されては45分間視聴するのがつらくなってくるだろう。では、自然な語り口とはどんなものか。説明するのがなかなか難しい。どんなことばで、どんな順序で語るか、これが先ず基本的なことであろうが、そのことばをどんな表情で語るか — 抑揚のつけかた、間のおきかた、そして身ぶり、手振りなどいわゆる視覚的な表情など — それらも大切な要素となろう。ただ、それをカメラの前に立つときだけ意識してもうまくいくわけがない。日常の中で、自然体として身につけるものだろう。

— 何回も中断しながら、とにかく最後までテストしてみる。テストを終えると13時になっていた。これでは時間がかかりそう、朗読の屋良有作さんと南場千絵子さんは声優である。朗読の速さや読み方に若干の注文を出せば確実に表現してもらえる。このままもう一度テストをやっても拘束時間を長くするだけだ。14時から朗読部分を先に収録することにした。

この回で紹介する作品の数が多すぎた。上に記した作品を全部紹介すると、講師が話す時間がとれなくなってしまう。「太陽をみつめて」「10½章で書かれた世界の歴史」「アインシュタインの怪物たち」については、このまま収録しておいて、第一回の講義にまわすことにした。

14時、朗読の収録。

「夜ごとのサーカス」 — 背中に翼のある、若い女のブランコ乗りが、訪ねてきた記者に自分の出生や初めて宙を飛んだときの気持ちの揺れを話している場面。初々しい感情の動きを南場千絵子さんが朗読してくれた。背景イメージはイラスト。翼のあるブランコ乗りを中心にサーカスのさまざまな曲芸の姿態が書き込まれ、なかなか楽しい童画のようなイラスト。しかしどうも朗読とイラストがうまく融け合わない。カメラの動きのリズムか、イラストか、あるいはことばのイメージとイラストが違うのか。

「フロベールの鸚鵡」 — 抜粋した部分は状景描写とフロベールについての記述。淡々と正確に読むしかないだろう。屋良有作さんもそのように朗読してくれた。背景イメージはルーアン市と記念館と遺品のビデオ。作品の内容とうまく一致。撮影にも行かないでこんなびったり一致する映像が入手出来たのも珍しい。しかしフロベールの銅像は未だ入手できず。是非欲しいところだ。

「太陽をみつめて」「10½章で書かれた世界の歴史」「アインシュタインの怪物たち」 — 三編とも人生や歴史について、作者あるいは主人公が述べているところ。これも正確な読みが必要だ。背景イメージを作るより読まれている内容をきちんととらえてもらうことが肝要だろう。朗読者をそのまま撮ることにした。

「アナホリッシュ」「罰」 — 朗読はGraham Lawさん。昨日収録したもの。背景イメージは前者ではアイルランドの自然を写した写真を使った。筆者が詩からイメージしたものと違うが、現地に撮影に行かないで他人が撮ったものを借りているのだからしかたない。後者はミイラ及び掘り出されたという泥炭地の写真を使った。筆者にとっても驚くべき写真であり、事実であるが、視聴者（学生）はどのように受けとめてくれるだろうか。

15時、収録再開。

朗読部分を再生しながら収録を始める。初めてのカメラ経験のためであろうか、何回か中断しながら収録をすすめる。スタジオでの講義は教室とは違う。自然に話すというのはなかなか難しい。教室では話が途切れても、横道にそれても、多少常軌を逸しても、多少の誤謬があっても後で訂正することができるし、笑って済ますこともできる。ところがテレビではそうはいかない。視聴者は不特定多数だし、収録時の取り決めも多い。でも、多少のトチリがあっても、多少間延びをしても、講師の思うままスタジオ内、いやスタジオを飛び出してもいい、自由に講義するというようなことがあってもいいかも知れない — というようなことをすぐ考える。いまでも何を話そうが自由だし、どこで講義しようが自由なのだ。ただカメラが見えないところや話す言葉が聞き取れなければテレビ放送にならないというだけだ。

つまらぬことを考えながら収録作業をすすめ、終わってみると18時に近くなっていた。

（とりあえず、時間内におさめて完プロはできたが、加藤講師は浮かない顔つきである。結局、日を改めて取り直した。）

以上が最初の番組ができるまでの（実は、まだ完成しなかったのだが）経緯である。そのほ

かの番組については次に記しておく。

9.29

第3回「雪どけからペレストロイカへ～ロシア文学～」

社会主義リアリズムの硬直した教義を破って、新しい才能が輩出した1960年代から、「ペレストロイカ以後」の1990年代までの流れを社会背景とともに概観し、さまざまな傾向の代表的作品をいくつか選んで分析する。

担当講師：沼野充義 / 加藤光也

作家：アレクサンドル・ソルジェニーツィン

アンドレイ・シニャフスキー

ワシーリイ・アクショーフ

ズビグニェフ・ヘルベルト

ヨシフ・ブロツキー

ビデオ：ブラート・オクジャワ；「ロシアの心を歌うーペレストロイカについて」

その他：作家の肖像写真

地図、年表 ほか。

第4回「もう一つのヨーロッパを求めて～東欧文学～」

ミウォシュ、ヘルベルト、バランチャク（ポーランド）、クンデラ（チェコ）などの作品に即して、現代東欧文学の豊かさにふれ、東欧文学の特殊性と普遍性について考察する。

担当講師：沼野充義 / 加藤光也

作家：チェスワフ・ミウォシュ

ズビグニェフ・ヘルベルト

スタニスワフ・バランチャク

ミラン・クンデラ

紹介する作品：C・ミウォシュ；Piosenka o końcu świata 「世界の終わりの歌」

朗 読：Ewa Pałasz-Rutkowaka (Warsaw University)

背景イメージ：Magdalena Abakanowicz；

ブロンズ彫刻「ベンチの上の立像」

Z・ヘルベルト；Kamyk 「小石」

朗 読：Sławomir Szule (Warsaw University)

背景イメージ：小石

S・バランチャク；Skoro już musisz kizycześć, rób to cicho

「どうせ泣かねばならぬなら」

朗 読：Sławomir Szulc

背景イメージ：ワルシャワのステル（撮影：塚原琢哉）

その他：肖像写真

10.1

第5回「多様性の時代～フランス文学～」

今日のフランス文学について、1. バルトを核とした批評言語の多様化 2. ソレルスに象徴される前衛の変容 3. クンデラ、クリスティヴァらが例証する異文化の融合と寄与以上の三点から紹介、考察する。

担当講師：西永良成

作家：Roland Barthes

Philippe Sollers

Le Clezio

Marguerite Duras

Milan Kundera

Julia Kristeva

Simone de Beauvoir

その他：肖像写真

10.27

第6回「ファンタジー・レジスタンスの系譜～イタリア文学～」

エーコの小説「薔薇の名前」とカルヴィーノの遺稿「次の1000年のための6つのメモ」を起点に、今日のイタリア文学が直面している特徴的な問題について考える。形式（断章か長編か）と言語（イタリア語か異言語か）の選択の問題となる。

担当講師：和田忠彦 / 加藤光也

作家：Pier paolo Pasolini

Italo CALVINO

Umbert ECO

Antonio TABUCCHI

Stefano BENNI

Robert ROVERSI

ビデオ：RAI で放送「Calvino, Italo」

TELEVISION SVIZZERA-LUGANO で放送 「Beneni, Stefano」

(BBC で放送 「LATE SHOW - Eco, Umberto」)

その他：肖像写真

年表 その他

11.2

第7回「『アメリカ』という物語の現在～アメリカ文学 (1)～」

現代アメリカ文学が「アメリカ」という「物語」をどう読み換えているかという点を主眼

に、レーモンド・カーヴァー、ポール・オースター、スティーヴ・エリクソン等、80年から90年代の代表的作家の作品を考える。

担当講師：柴田元幸 / 加藤光也

作家：Raymond Carver

Paul Auster

Steve Ericson

ビデオ：KCTS 9 制作；「Carver documentary」

American Poetry Archives；「Paul Auster」

バロバロッサ作戦

その他：肖像写真

テス・ギャラガー、ゲリ・ラウバルらの写真

その他。

12.1

第8回「文学における『中心』と『周縁』～シンポジウム～」

文学における「中心」と「周縁」をめぐる、第1回から第8までの講師による討議。

担当講師：加藤光也

沼野充義

西永良成

和田忠彦

柴田元幸

12.3

第9回「女と文学～アメリカ文学 (2)～」

60年代以降、アメリカ文学では女性詩人・作家の活躍がめだつようになり、現在では彼女たちに言及しないではアメリカ文学を語ることが出来なくなった。この「変革」の原因に触れながら、個々の詩人・作家を紹介する。

担当講師：渡辺桃子 / 加藤光也

作家：Adrienne Rich

Toni Morrison

Margaret Atwood

Louise Erdrich

Amy Tan

紹介する作品：A. Rich; Diving into the Wreck 「難破船へ潜る」

朗 読：Adrienne Rich

背景イメージ：難破船の水中撮影

M. Atwood; The Handmaid's Tale 「侍女の物語」

朗 読：遠藤みやこ

背景イメージ：イラスト（絵・恩田和幸）
ビデオ：クリントン大統領就任式（ニュース）
Watershed Tapes; Adrienne Rich
The Rolland Collection; Toni Morrison
その他：肖像写真 ほか。

1994. 1. 5

第10回「リアリズムとマジックリアリズム～スペインと中米の文学～」

スペインとメキシコ、キューバ、グアテマラの文学を紹介する。とくに、スペインのカミロ・ホセ・セラ（ノーベル文学賞）、メキシコのオクタビオ・パス（ノーベル文学賞）、カルロス・フエンテス、キューバのアレホ・カルペンティールを中心に文学の動向を考察する。

担当講師：木村榮一 / 加藤光也

作家：Camilo José Cela

Octavio Paz

Carlos Fuentes

Alvaro Carpentier

その他：肖像写真

地図 ほか

第11回「驚異の小説世界～南アメリカの文学～」

コロンビアのガブリエル・ガルシア＝マルケス（ノーベル文学賞）、ペルーのマリオ・バルガス＝リョサ、チリのパブロ・ネルーダ（ノーベル文学賞）、ホセ・ドノソ、アルゼンチンのホルヘ・ルイス・ボルヘス、フリオ・コルタサル、マヌエル・ブイグなどをとりあげ、中南米の動向を探る。

担当講師：木村榮一 / 加藤光也

作家：G. García Márquez

Mario Vargas Llosa

Pablo Neruda

Jorge Luis Borges

Julio Cortázar

その他：肖像写真

地図 ほか。

1. 19

第13回「神話と口承の伝統～アフリカ文学～」

アフリカ文学の作家たちは、植民地支配、独立、その後の新植民地主義というアフリカのおかれた状況の下で旺盛な活動を行ってきた。今回はアチェベ、ショインカ（ともにナイ

ジェリア) ホーヴェ (ジンバブエ) などの小説・詩を紹介する。

担当講師：福島富士男 / 加藤光也

作家：Chinua Achebe

Wole Soyinka

Ben Okri

Ngugi wa Thiong

Chenjerai Hove

Flora Nwapa

紹介する作品：W・Soyinka; Abiku「アビク」

朗 読：John Ngaya Mkabi (東京大学)

背景イメージ：ナイジェリア、ヨルバランドの風景と神々

(撮影：板垣真理子)

C・Hove; Bones「骨たち」

朗 読：C・Hove

背景イメージ：ジンバブエの農村

ビデオ：ノーベル賞授賞式、ジンバブエ独立式典、ジンバブエ農村 (ニュース)

その他：肖像写真

地図 ほか。

1.26

第12回「ポスト・コロニアルの文学～英語文学 (2)～」

イギリス以外の英語圏出身の作家たち、ラシュディ (インド)、ウォルコット (西インド)、
ゴーディマーなどの作品を通じて、新しい英語文学のひろがりについて考えてみたい。

担当講師：加藤光也

福島富士男

作家：Peter Carey

Salman Rushdie

Derec Walcott

Nadine Gordimer

Mongane wally serote

紹介する作品：D・Walcott; Map of the New World, I Archipelagoes

「新世界の地図 I 多島海」

朗 読：John Ngaya Mkabi (東京大学)

背景イメージ：カリブ海空撮

ビデオ：シャープビル事件、ソウエトの蜂起、マンデラ釈放 (ニュース)

The Rolland Collection; Peter Carey

BBC Video Library; Nadine Gordimer

その他：肖像写真

地図、年表 ほか。

第1回「今日の世界文学のために」

二人の作家、ジェイムズ・ジョイスとガートルード・スタインを紹介しながら「世界文学」の大きな見取り図と歴史的展望を描く。

担当講師：加藤光也

作家：James Joyce

Gertrude Stein

Julian Barnes

紹介する作品：J・Barns; Staring at the Sun「太陽をみつめて」

朗 読：屋良有作

背景イメージ：本、ジャズ演奏

J・Barns; A History of the World in 10½ Chapters

「10½章で書かれた世界の歴史」

朗 読：屋良有作

背景イメージ：本

その他：肖像写真

Marcel Duchamp, Pablo Picasso の写真

ダブリンの写真

地図、ほか。

2.2

第15回「文学の新しい声～シンポジウム～」

第9回から第14回までの講義をふまえて、「女と文学」「非ヨーロッパ世界の文学」をめぐって討議。

担当講師：加藤光也

渡部桃子

木村榮一

福島富士男

安 宇 植

3.18

第14回「開放と新たな悲劇～韓国文学～」

植民地からの開放とそれに続く南北の分断、朝鮮戦争、その後の4.19学生革命、さらに高度成長、民主革命と韓国の状況は大きく変わるが、そのなかでの文学の展開を黄順元、崔仁勲、金芝河、尹興吉らの具体的な作品に即してたどる。

担当講師：安 宇 植 / 加藤光也

作家：黄 順 元

崔 仁 勲
金 芝 河
尹 興 吉

紹介する作品：黄 順 元；「鶴」

朗 読：中尾みち雄

崔仁勲；「広場」

朗 読：中尾みち雄

金芝河；「五賊」

朗 読：安宇植

背景イメージ：イラスト（絵：金森健生）

尹興吉；「長雨」

朗 読：中尾みち雄

ビデオ：'45年 8 月15日の東京とソウル、朝鮮戦争（ニュース）

その他：肖像写真 ほか。